

高知県香美郡

下分遠崎遺跡 (I)

(香我美町教育委員会埋蔵文化財報告書第4集)



1989-3

香我美町教育委員会

序

下分遠崎地区は、西方に大きく開いた山南盆地の出口に位置し、香宗川沖積層の肥沃な土地は古くから農耕地として、又、交通の要衝として重要視され中世には大忍庄屈指の豪族中氏の領地として栄えたと伝えられており、中氏と共に地域の豪族とし覇をとなえた香宗我部氏、長宗我部氏との葛藤も伝えられ一所懸命戦国武士のロマンが彷彿される。

また、このような土地故、埋蔵された歴史の跡が予想はされていたが、今回県営圃場整備事業として農地の改良が行われるに至り、去る昭和61年遺跡の試掘調査が県教育委員会の協力により行われ多数の埋蔵文化財が発掘された。それは中世のものでなく、遠く弥生時代の遺跡であり、今さらながら地域の歴史の古さに驚いたものである。

平成元年改良工事の施行が決まるに先立ち、本格的な発掘調査を実施するに、次第に歴史のベールははがされ、多くの遺物とともに古代人の集落跡、農耕跡の外、遠く瀬戸内との交流の遺跡まで発見されたことは極めて意義あるものと確信する。

本書はその発掘調査をまとめたものであり広く文化財保護の資料として、活用されれば幸いである。

最後に調査にあたり、ご指導頂きました県教育委員会高橋啓明、出原恵三の各先生方並びに地権者、南国耕地事務所、山南土地改良区の方々など調査に御協力頂いた方々に心から御礼申し上げます。

平成元年3月

香我美町教育長 近森 正雄

例 言

1. 本書は、香我美町山南地区県営園場整備事業にかかわる^{しもがもとろき}下分遠崎遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、高知県香美郡香我美町下分遠崎に所在する。
3. 調査対象面積は15,000㎡であり、発掘調査面積は410㎡（国庫補助対象発掘調査面積82㎡、緊急発掘調査面積328㎡）である。
4. 調査は、香我美町教育委員会の依頼により、高知県教育委員会が行った。
調査顧問 岡本 健児（高知県文化財保護審議会会長）
調査員 高橋 啓明（高知県教育委員会・文化振興課社会教育主事）
出原 恵三（高知県教育委員会・文化振興課主事）
事務担当 清藤 正郎（香我美町教育委員会・社会教育係長）
5. 本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ章を出原、第Ⅱ章を高橋、第Ⅴ・Ⅵ章については遺構を高橋、遺物を出原が分担した。
6. 遺構については、SB（掘立柱建物）、SK（土坑）、SX（不明遺構）、SD（溝）、P（柱穴）で標示した。
7. 自然遺物の鑑定及びその結果の報告については名古屋大学文学部渡辺誠教授にお願いした。記して深く謝意を表すものである。
8. 現場の測量、図面整理は、小松幹典氏にお願いした。記して謝意を表したい。
9. 調査にあたっては、地元土地改良区、南国耕地事務所の全面的な協力を得た。記して深く謝意を表したい。
10. 遺物は香我美町教育委員会で保管している。
11. 木製品については、本報告書で触れることができなかった。後日『下分遠崎遺跡』Ⅱ（木器編）を組む予定である。

本文目次

第Ⅰ章	遺跡の立地と概要	1
第Ⅱ章	発掘調査の経過	2
第Ⅲ章	調査の方法	2
第Ⅳ章	基本層序	3
第Ⅴ章	遺構と遺物	4
第Ⅵ章	考察	29
1	遺物	29
2	遺構	41
第Ⅶ章	自然遺物	49

挿 図 目 次

- 第1図：周辺の遺跡
- 第2図：調査区位置図
- 第3図：Aトレンチの基本層序と検出遺構全体図
- 第4図：Aトレンチ SX3、SK1～5・14及び出土遺物実測図
- 第5図：Aトレンチ SD1・3・4、SX1及び出土遺物実測図
- 第6図：Aトレンチ SD4・5出土遺物及びSK35、SD5、SX2実測図
- 第7図：Aトレンチ SB1～3 実測図
- 第8図：Aトレンチ SK6・7、SD5、P27・34出土遺物及びSK6～9実測図
- 第9図：Aトレンチ SK8～10・12出土遺物及びSK10～13実測図
- 第10図：Aトレンチ SK12・13・15 出土遺物及びSK15・31・32実測図
- 第11図：Aトレンチ SD1・5、SK34、P40・43・93・103・309出土遺物及びSK27・33・34、SD8・9、P40・60、柱1 実測図
- 第12図：Aトレンチ SD5、SK15 出土遺物実測図
- 第13図：Bトレンチの基本層序と検出遺構全体図
- 第14図：Bトレンチ SK21～24、P190 出土遺物及びSB4、SK21～23・25、SD7 実測図
- 第15図：Bトレンチ SK18・19出土遺物及びSK16～20・24・26・28・39・40 SD6 実測図
- 第16図：Bトレンチ SK29・30、P271・278・281・325 出土遺物及びSK29・30実測図
- 第17図：前期壺型式分類
- 第18図：前期甕型式分類
- 第19図：中期壺型式分類
- 第20図：土器拓影
- 第21図：包含層出土の石器
- 第22図：包含層出土遺物実測図
- 第23図：包含層出土遺物実測図
- 第24図：包含層出土遺物実測図
- 第25図：包含層出土遺物実測図

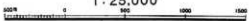
写真図版目次

- PL1 調査区全景（南から）
PL2 A区中層遺構検出状況（東から）
PL3 A区中層遺構完掘状況（東から）
PL4 A区下層（K層上面）遺物出土状況（東から）、A区遺構完掘状況（西から）
PL5 B区遺構検出状況（西から）
PL6 SK31ヒョウタン出土状況、籠状遺物出土状況
PL7 SK10甕（70）出土状況
PL8 包含層土器出土状況（A区、V層）
PL9 包含層土器出土状況（A区、V層）、SK15甕（92）、猪下顎出土状況
PL10 SD弓出土状況、柱1半截（A区、K層）
PL11 上層（V層）炭化物
PL12 P43柱根、土器出土状況、P40土器転用礎盤出土状況
PL13 鋤出土状況（A区、V層）、SD3-a包丁形木製品出土状況
PL14 鋤出土状況（A区、Ⅷ層）、鋤出土状況（A区、Ⅷ層）
PL15 SD5鹿角出土状況、SK12鹿下顎出土状況
PL16 P271内扁平片刃石斧出土状況、扁平片刃石斧出土状況（A区、V層）
PL17 石包丁・土器底部出土状況（Ⅷ層）、石製紡錘車出土状況（B区、Ⅷ層）
PL18 甕出土状況（A区、Ⅷ層）、壺(144)出土状況（A区・V層）
PL19 包含層土器出土状況（A区、Ⅷ層）、同上（A区、Ⅷ層）
PL20 包含層土器出土状況（A区、Ⅷ層）、同上（A区、V層）
PL21 SD3a遺物出土状況、SD3a・b完掘状況
PL22 SD3a・bセクション、SD4・5完掘状況
PL23 SX2完掘状況、籠状木製品
PL24 SD5遺物出土状況、SD1遺物出土状況
PL25 SK8遺物出土状況、SK12遺物出土状況
PL26 SK23完掘状況、SK5セクション
PL27 壺、ミニチュア・壺
PL28 甕・壺
PL29 甕
PL30 壺
PL31 壺・口縁部胴部細片
PL32 壺口縁部
PL33 突帯文各種
PL34 壺文様各種（前期）
PL35 壺文様各種（中期）
PL36 紡錘車・石包丁・扁平片刃石斧・大型蛤刃石斧、管玉・石鏃・磨製穿孔具
PL37 刃器・打製石包丁・叩石、土器底部木の葉圧痕
PL38 自然遺物



- | | |
|-----------|-------------|
| 1. 大崎山古墳 | 8. 幡山遺跡 |
| 2. 安弘遺跡 | 9. 的場遺跡 |
| 3. 菅我遺跡 | 10. 幡山古墳 |
| 4. 下分遺跡遺跡 | 11. 鳴子古墳 |
| 5. 神地遺跡 | 12. 花散里古墳 |
| 6. 押原遺跡 | 13. 鳴子遺跡 |
| 7. 十万遺跡 | 14. 徳王子古窯社群 |

1:25,000



第1図 周辺の遺跡

第1章 遺跡の立地と概要

土佐の同一高知県は、北を四国山地に囲まれ南は太平洋に面し東西に長い海岸線をもっている。その中央部に展開する高知平野は南四国最大の穀倉であり、かつては二期作地帯として有名であったが、現在は園芸作物を主とする地域へと大きく変貌している。高知平野の中心部を形成した物部川右岸の旧自然堤防上には、弥生時代前期初頭の集落の全容を明らかにすることができた田村遺跡群がある。当田村遺跡群は、弥生時代の初期の階段から稲作文化を受容し、弥生社会発展の中で終始その機軸となった拠点集落であったことを示している。従って周辺地域に存在する中・小の集落は、常に田村遺跡群との有機的な関係の中で展開していったものと考えてよからう。

下分遺跡群は、香美郡香我美町下分にあり高知平野の東端部に開けた沖積地に位置している。田村遺跡群からは、物部川を隔てて東方約6km、現海岸線からは3kmの地点にあり、標高は10m前後を測る。昭和62年度の試掘調査によって、弥生時代前期末から中期前葉にわたって営まれた集落遺跡であることが明らかとなった。また湿潤な土地に立地するところから累下では初めての弥生時代の木製品や獣骨・靱・各種々子等が多量に検出され注目を集めている。同時に行った花粉分析では、最下層部においてアカガシ亜属の優勢であることが判明した。このことは、当遺跡が形成される弥生時代前期末以前に、すでに人間の手が加えられていたことを示すものであり興味深い。

周辺遺跡との関係を見れば、时期的に先行するものとして当遺跡の東方1.2kmにある十万遺跡を挙げることができる。ここからは、縄文時代晩期の貯蔵穴に伴って黒色磨研の浅鉢が出土しており、その他弥生前期・中期前葉の遺物も散見される。弥生中期後半になるとそれまで平野部にあった遺跡が丘陵上に占地するようになり、その例としての楊遺跡や棒ヶ谷遺跡を挙げることができる。しかしながら本格的な発掘調査が行われていないため具体的な状況は不明な点が多い。次いで弥生時代後期、わけてもその後半に至ると遺跡は再び低地部に展開するようになり、下分遺跡群の南と北を流れる香宗川や山北川の中上流域の河谷平野には、数多くの小規模な集落が出現し、丘陵斜面からは壺棺墓が発見されている。前期古墳は未発見であるが、古墳時代中期には徳善天王古墳が築かれ、続く後期には、香宗川流域の鳴呼・輻山で数基づつの古墳が確認されている。また7世紀になると徳王子古窯址群が営まれており、当地が政治的・経済的に安定した成長を遂げていたことが窺われる。そしてこのような地域的发展を背景として奈良・平安時代に至ると、先に挙げた十万遺跡や当遺跡西に接する曾我遺跡には豪族館や郡衙級の建物群が出現するようになる。

下分遺跡群は、かかる地域的发展の最初の出発点として位置付けることができよう。それ自身重要な歴史的意義を有するものであるが、物部川以東における弥生時代前期遺跡の唯一の調査例であり、周辺地域における弥生社会の成立が如何に展開されたかという問題を究明する上においても重要な鍵を握る遺跡である。

第Ⅱ章 発掘調査に至る経過

香長平野東端部を北流する香宗川中流域の農地66ヘクタールを対象とした山南地区県営圃場整備事業は、農地の区画整理と道・水路の系統的整備によって農地の集団化と利用増進を図り、農業生産力の増大と経営の安定と発展に寄与することを目的として計画された。すなわち、小区圃農地など旧態依然の農業経営から脱却し、近代的農業へと転換させようとするものである。

一方、当事業対象地区には、原始時代以来今日の山南を築き上げた祖先の営みの足跡ともいふべき埋蔵文化財が確認されており、特に遠崎地区においては、県下でも数少ない弥生時代前期の遺物の散布が見られる。当事業が施行せられれば、現状は大きく変更され、地下の埋蔵文化財も極めて甚大な影響を受けることは必定である。

遺跡の性格、範囲、遺構の深度等の状況を把握する目的で昭和61年10月13日から12月16日まで試掘調査を実施した。調査は、A～Dトレンチ1,382mを実施した。その結果、土坑、溝、柱穴等の遺構が検出され、遺物として弥生土器、石器、獣骨、植物遺体、柱根等が出土したことなどから、本遺跡は保存状況の良好な弥生時代前期、中期の遺跡であることが確認された。

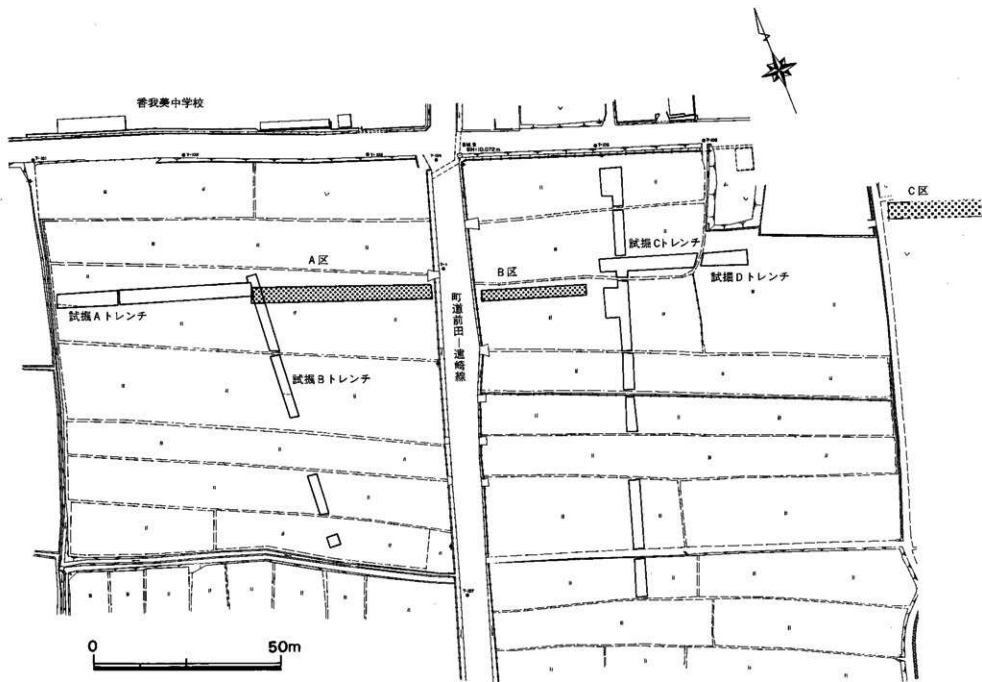
試掘調査の結果をもとに、文化財保護部局と開発部局とが協議を重ね一部の事業変更もなされた。しかし、事業の施行上止む得ず失われる範囲について記録保存のための本発掘調査を昭和63年10月3日から11月28日まで行った。

第Ⅲ章 調査の方法

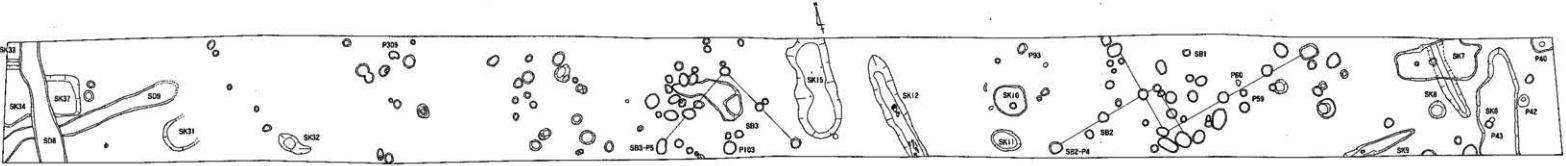
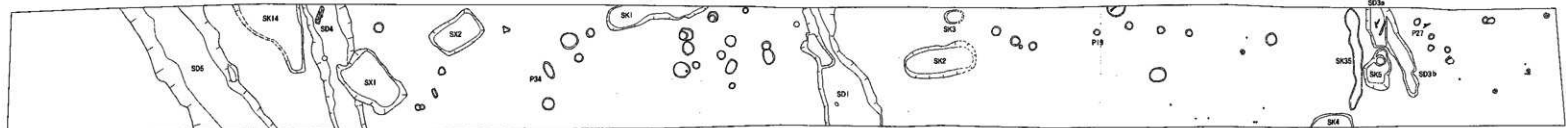
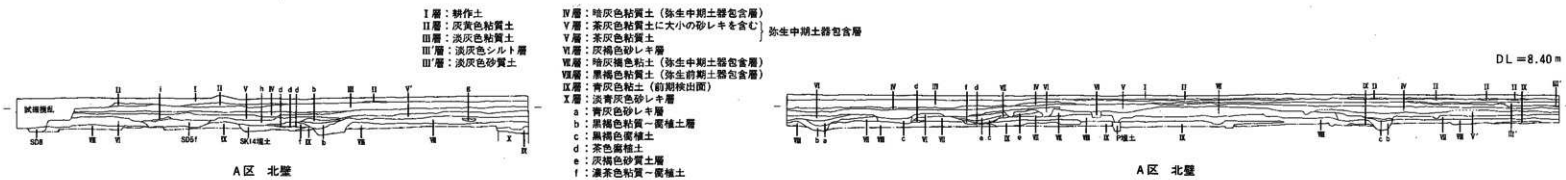
昭和61年度に実施した試掘調査により当遺跡の範囲や遺物包含層・遺構検出面の深度等が明らかになっている。したがって今次本発掘調査の対象地は、香我美中学校から南50mの水田をほぼ東西に走る水路部分に絞ることができた。調査区の設定は、町道前田一遠崎線を挟んで西側をA区、東側をB区とした。A区は、試掘時のAトレンチからわずかに南にずれるが、その延長線上に4m×50mの発掘区を設定した。B区は、町道を越えてAトレンチの延長に3m×30mの発掘区を設定した。この他、B区発掘区の東端から東へ100mの地点に4m×30mのC区を設定した。

発掘調査にあたっては、現耕作土・床土・旧耕作土（Ⅰ～Ⅲ層）を重機で掘削し、Ⅳ層より下層の弥生時代の遺物包含層については、層位別に人力で下げていった。包含層の遺物取り上げは、最も広いA区については調査区をA-1～A-4に小分割して層位的に取り上げた。B区は、層位的に取り上げた。A・B区については、弥生時代前期の遺構検出面で、無遺物層となっているⅣ層まで下げ、部分的に礫層（Ⅹ層）まで下げた。C区においては、遺物包含層・遺構は認められなかった。

基本層序は、北壁で観察を行ったがA区については、北壁に直交するかたちで残したバンク西壁の観察も行った。またA区では基本層序の剥ぎ取りも実施した。また遺構の実測は公共座標に準拠した。



第 2 図 調査区位置図



第3図 Aトレンチの基本層序と検出遺構全体図

第Ⅳ章 基本層序

下分遺跡遺跡とその周辺部の低地は、香宗川と山北川によって形成された沖積平野であり、A・B区の現地表面の標高は8.8m、C区は9.0mを測る。ここでは、遺構と遺物包含層が確認できた4区とB区について、基本層序を構成する各層単の内容と堆積時期の説明を行う。

1 A区(第3図)

A区の基本層序は、層相の違いから2部層に大別される。上部層は、粘質土とシルトと砂礫によって構成される厚さ1m前後を測り、上位よりI層からK層に細分することができる。下部層は、礫を主体とするX層であるが層厚を明らかにすることはできなかった。以下、下位より概説する。

X層：淡青灰色の礫層である。礫は、2～3cmのものから拳大のものが多い。礫種は、砂岩・チャートが多い。本層は無遺物層で、K層に整合で覆われる。

K層：青灰色粘土であり、無遺物層で弥生時代前期の遺構検出面である。試掘調査のK層に対応する。本層は、Ⅴ層に整合で覆われる。

Ⅴ層：黒褐色粘土で炭化物を多く含む。弥生時代前期の遺物包含層であり、層厚は7～10cmを測る。試掘調査のⅤ層に対応するもので、上位層に不整合で覆われる。また弥生時代中期Iの遺構検出面であり、前期の遺構埋土となっている。

Ⅵ層：炭化物を含んだ暗灰色の粘土で、弥生時代前期・中期前半の遺物を多く含んでいる。層厚は、0～30cmを測る。上部層に不整合で覆われており、調査区西方では本層を確認することができない。また多くの場合中期の遺構埋土となっている。しかし本層は、B区では確認できなかった。

Ⅶ層：灰褐色砂礫層でわずかに弥生中期土器を含んでいる。A区の東側3分の1とB区西半分では確認することができなかった。層厚は、0～33cmを測る。試掘調査のⅦ層に対応させることができる。

V層：茶灰色粘質土に砂礫を含む、弥生中期の遺物包含層を成形しており、前・中期の遺物を多く含んでいる。本層は、調査区東部においては砂礫を含まないV層を分層することができる。層厚は5～38cmを測る。

N層：暗灰色粘土で、弥生中期土器を少量含んでいる。層厚は、0～10cmを測る。調査区中央部には存在しないか、薄い堆積であり、東・西両端に安定した堆積を見せる。試掘調査のN層に対応する。

Ⅲ層：淡灰色粘土であり、近世以降の旧水田耕作土と考えられる。層厚は5～30cmを測り、調査区東端及びB区では、Ⅲ'・Ⅲ''に分かれる。

I層：旧水田耕作土である。層厚は0～14cmを測り、A区中央部では確認できなかった。

I層：現代水田耕作土である。層厚は10～18cmである。

第V章 遺構と遺物

1. Aトレンチ

Aトレンチの遺構は、上層で不明遺構2、粘土塊を包蔵する遺構4ヶ所、炭化物の集中散布地4ヶ所及び半径約3.4mの円の範囲に集中した土器(131、158)を検出した。中層で土坑7基、溝5条、不明遺構2、柱穴多数を検出した。下層で掘立柱建物3棟、土坑14基、溝2条、柱穴多数を検出した。埋土は特にことわりのない場合中層は、暗灰色粘質土単純一層であり、下層は、黒褐色粘土単純一層である。また遺構の組合せやその変遷については次章に譲る。

上層

SX3 (第4図)

SX3は調査区の東部に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径1.65×短径1.15m、検出面からの深さは18.0cmを測る。断面逆台形を呈し、床面は凹凸がみられる。埋土は炭化物と灰が詰まる。

出土遺物は、弥生土器の細片が少量出土したが図示できなかった。

SX4 (第3図)

SX4は、SX3の西に位置する。平面プランは不整形を呈し、長径0.88×短径0.70m、検出面からの深さは9.0cmを測る。断面逆台形を呈し、床面は水平な面をなす。埋土は炭化物と灰が詰まる。

出土遺物は、弥生土器の細片が少量出土したが図示できなかった。なお床面から炭化材を検出した。

粘土塊を包蔵する遺構 (第4図)

粘土塊を包蔵する遺構は4ヶ所検出した。粘土1は楕円形のプランで長径55.0×短径46.0cmを測る。粘土2は不整形のプランで長径85.0×短径23.0cmを測る。粘土3は不整形のプランで長径42.0×短径20.0cmを測る。粘土4は不整形のプランで長径62.0×短径35.0cmを測る。厚さは1～5cmで、漏斗状の堆積をしている。これらの粘土は、周囲のものとは全く異なり、明茶色に発色し、混和材の砂粒やシャーモットを多く含んでおり、土器製作用の粘土と考えられる。

炭化物の集中散布地 (第3図)

炭化物の広がり、いずれも粘土塊の検出された周辺で第3図に示すとおり検出した。厚みは1～2cmである。

中層

土坑

SK1 (第4図)

SK1は、調査区の中央よりやや西に位置する。調査区外に半分以上が出ているため形態や規模は把握できないが、深さ16.0cmを測る。埋土はI層：腐植土、II層：暗灰色粘質土である。

出土遺物は、細片で図示できたのは弥生土器甕(2)、壺(1)のみである。中期初頭の土器である。他に不明獣骨、ドングリ、靱等がある。

SK2(第4図)

SK2は調査区よりやや東、SK3の南に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径2.25×短径0.97m、検出面からの深さは12.0~15.0cmを測る。断面は逆台形を呈し、床面は水平な面をなす。

出土遺物は、細片で図示できたのは弥生土器甕(4)、鉢(3)である。

SK3(第4図)

SK3はSK2の北側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径0.6×短径0.4m、検出面からの深さは12.0cmを測る。断面は逆台形を呈し、床面は水平な面をなす。

出土遺物は、不明獣骨の細片が少量出土したのみである。

SK4(第4図)

SK4は調査区の東端部に位置する。調査区外に1部出ているが、平面プランは楕円形を呈すと考えられる。長径1.35以上×短径0.43m以上、検出面からの深さは10.0cmを測る。壁は急傾斜で立ちあがり、床面は水平な面をなす。

出土遺物は、細片で図示できたのは弥生土器甕(5)のみである。他にドングリがある。

SK5(第4図)

SK5はSK35とSD3bとの間に位置する。平面プランは不整形を呈し、長径1.3×短径0.75m、検出面からの深さは10.0~13.0cmを測る。断面舟底状を呈し、床面はほぼ水平な面をなす。埋土はI層：黒色粘土、II層：茶色腐植土、III層：炭化層、IV層：黒褐色粘土、V層：茶色腐植土層と炭化層、VI層：白色灰である。

出土遺物は細片が多く図示できたのは弥生土器甕(7・8)、壺(6・9)である。他に建築材と見られる木器がある。

SK14(第4図)

SK14は調査区の西、SD4とSD5の間に位置する。調査区外に出ているため、形態、規模は不明であるが、検出した平面プランは不整形を呈し、長径2.35×1.87m、検出面からの深さは10.0~20.0cmを測る。壁は急傾斜で立ちあがり、床面は水平な面をなす。埋土は黒色粘土単純一層である。

出土遺物は、弥生土器甕(12)、壺(10・11・13)である。他に不明獣骨がある。

SK35(第6図)

SK35は調査区の東端部、SK4の北側に位置する。平面プランは溝状を呈し、長径2.9×短径0.48m、検出面からの深さは13.0cmを測る。断面逆台形を呈し、床面は水平な面をなす。

出土遺物は、腐植土に木片が混ってあったが図示できるものはない。

溝

SD1 (第5図)

SD1は調査区のはほぼ中央部に位置し、調査区に直交する溝で、長さ3.95m以上、幅0.85～1.80m、検出面からの深さは12.5～18.4cmを測る。断面は西と東で大小の2つの連なる舟底状を呈す。床面は、南側が深く、北側が浅くなっている。又南側に径約14.0cmの柱根が残る。埋土はⅠ層：濃茶褐色粘質土、Ⅱ層：黒褐色粘土に腐植土が混る。Ⅲ層：砂礫、Ⅳ層：腐植土である。

出土遺物は、多量であるが、図示できたのは弥生土器甕(14～19)、壺(20)、磨製穿孔具(79)、石包丁(80)である。他に不明獣骨、瓜科の種子、堅果類、矢柄先端部、葦の編物等がある。

SD3a (第5図)

SD3aはSK35の東側に位置し、SD3bを切る。北側は調査区外に出る。長さ1.25m以上、幅1.48～0.65m、検出面からの深さは28.4～36.1cmを測る。断面は舟底状を呈す。埋土はⅠ層：暗灰褐色粘質土(やや濃い)、Ⅱ層：腐植土、Ⅲ層：黒褐色粘質土、Ⅳ層：黒褐色腐植土層である。

出土遺物は、少量で図示できるものはないが土器片はすべて前期末のものである。他にドングリ、萩等がある。

SD3b (第5図)

SD3bはSK5の東側に位置し、SD3aに切られる。長さ2.95m、幅30.0～55cm、検出面からの深さは3.0～18.2cmを測る。断面は舟底状を呈す。埋土はⅠ層：暗灰褐色粘質土、Ⅱ層：暗灰褐色粘質土、Ⅲ層：腐植土、Ⅳ層：暗灰色粘土である。

出土遺物は、少量で図示できたのは、弥生土器甕(21、22)、壺(23、24)、甕蓋(25)がある共に前期末のものである。他に床直上から木製包丁、ドングリ、萩等がある。

SD4 (第5・6図)

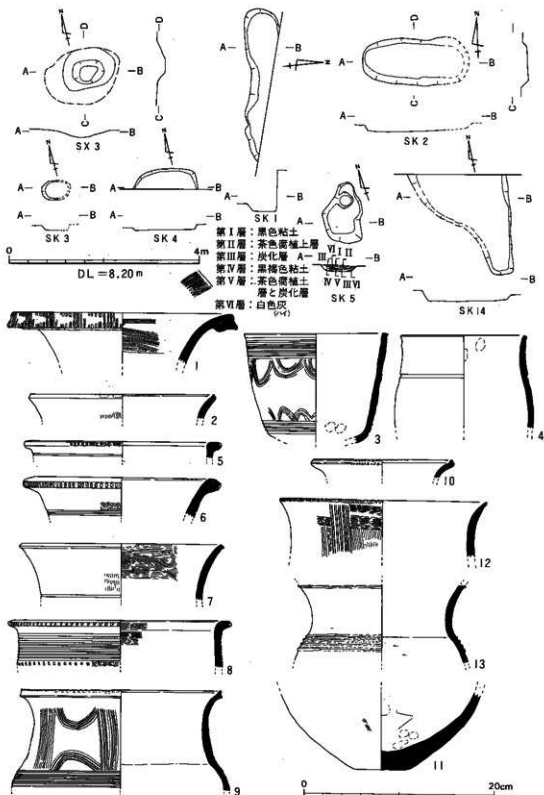
SD4は調査区の西部、SK14の東側に位置し、調査区に直交する。長さ4.0m以上、幅0.95～1.30m、検出面から深さは29.3～36.7cmを測る。断面舟底状を呈す。南側が深く、北側が浅い。標高差は約16.0cmを測る。中央部西側に径17.0cmの柱根が残るが、先後関係は、柱根が後からのものと考えられる。埋土はⅠ層：腐植土混ざりの黒色粘土、Ⅱ層：黒色粘土である。

出土遺物は、多量で弥生土器甕(28～30)、壺(27)、甕蓋(31)、ミニチュア土器(26)がある。他に木製品鋤先、板・棒状建築材、顎骨その他不明獣骨、鯉の骨等、多量のドングリの殻の細片等がある。中期Ⅰに属する。

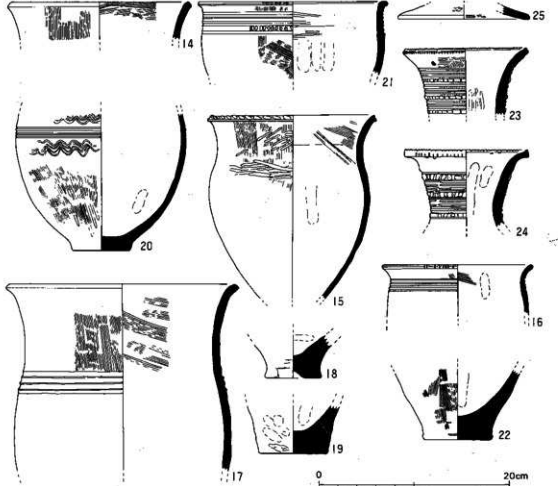
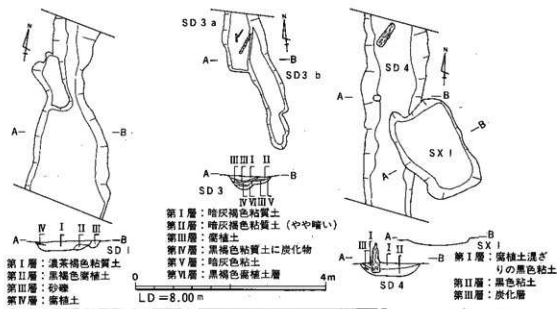
SD5 (第6、12図)

SD5はSD4の西側に隣接し、調査区に直交する。長さ4.45m以上、幅1.9～2.4m、検出面からの深さは13.4～21.3cmを測る。断面舟底状を呈す。南側が深く、北側が浅い。比高差は約9cmを測る。埋土はⅠ層：濃茶色腐植土と黒色粘土が混ざる。Ⅱ層：黒褐色粘質土である。

出土遺物は多量で、有文の弥生土器片146点中25点が構描文を施す。図示できたのは弥生土



第4図 AトレンチSX1、SK1～5・14出土遺物及び遺構実測図



第5図 AトレンチSD 1・3・4、SX 1及び出土遺物実測図

器甕 (40・43)、壺 (32~37・42・44・45)、鉢 (38・41)、石器蛤刃石斧 (85)、石鎌 (81・82)、刃器 (87) である。他に、鹿角、鹿その他の獣骨、植物繊維をリング状に巻きつけたもの等がある。中期Ⅱに属すると考えられる。

不明遺構

SX 1 (第5図)

SX 1は調査区の西部SX 2の南西側に位置し、SD 4を切る。平面プランは隅丸方形を呈し、長径2.00×1.37m、検出面からの深さは21.0~14.0cmを測る。断面舟底状を呈すが、東壁には木の皮(スギまたはヒノキと思われる)が貼りつく。埋土としてドンダリの殻細片、榎、オガクズ状の腐植土が混り合って詰まっていた。

出土遺物は40点あまりの土器の細片があるが、図示することはできなかった。他に床面に柳状の皮を剥いだ細木をつかった蓆状編物を検出した。

SX 2 (第6図)

SX 2はSX 1の北東側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長径1.53×短径0.97m、検出面からの深さは3.0~10.0cmを測る。断面逆台形を呈し、床面は水平な面をなす。埋土として腐植土が詰まり、床面に広葉樹の葉を敷き詰める。

出土遺物は20点あまりの土器の細片があるが、図示することはできなかった。

柱穴

P27 (第8図)

P27はSD 3 bの東に位置する。平面プランは円形を呈し、長径19.5cm、検出面からの深さ12.3cmを測る。

出土遺物は弥生土器甕(46)のみである。前期のものである。

P34 (第8図)

P34はSK 1の南東側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径53.0×短径26.0cm、検出面からの深さは18.1cmを測る。

出土遺物は少量で図示できたのは弥生壺(47)である。

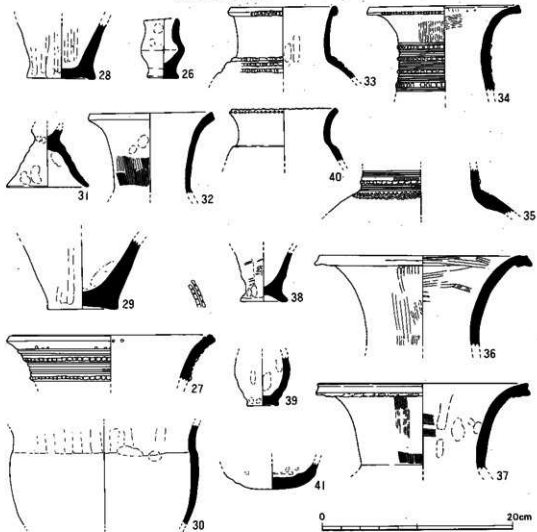
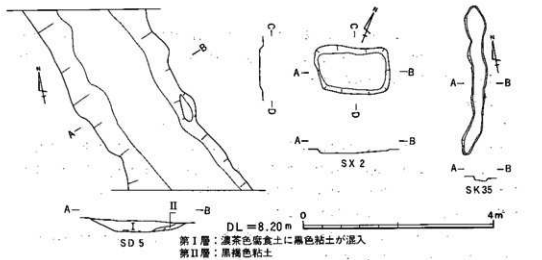
下層

掘立柱建物

SB 1 (第7図)

SB 1は調査区の西部、SK 7の西側に位置し半分以上が調査区外に出る。建物は、桁行3間(5.12m)以上×梁間2間(2.97m)以上の東西棟で、棟方向はN-72.5°-Eである。柱穴の平面は、円形及び楕円形を呈し直径は、34.0~58.0cm、検出面からの深さは、9.2~26.6cmを測る。柱間距離は、桁行1.42~2.15m間、梁間1.35~1.62m間となっている。SB 2と重複関係にあるが先後関係は不明である。

出土遺物は少量で壺等の細片があるが図示できたものはない。



第6図 AトレンチSD 4、5出土遺物及びSK 35、SD 5、SX 2実測図

SB 2 (第7図)

SB 2はSB 1の東側で重複する位置にあり、半分以上が調査区外に出る。建物は、桁行2間(3.65m)×1間(1.76m)以上の東西棟で、棟方向はN-73.5'-Eである。柱穴の平面は円形を呈し、直径は、25.0~54.0cm、検出面からの深さは16.7~27.8cmを測る。柱間距離は、桁行1.77~1.88m間、梁間1.76m間となっている。SB 1と重複関係にあるが先後関係は不明である。

出土遺物は壺底部等少量で図示できるものはない。

SB 3 (第7図)

SB 3はSK 15の西側に位置し半分以上が調査区外に出る。建物は3間(3.10m)以上×3間(2.90m)以上の規模で、長軸は不明である。柱穴の平面は、円形及び楕円形を呈し、直径は、27.0~49.0cm、検出面からの深さは、15.5~34.1cmを測る。柱間距離は、0.82~1.17m間となっている。P 5は建替えのものの可能性がある。SK 13と重複関係にあるが先後関係は不明である。

出土遺物は壺など少量あるが、図示できなかった。すべて前期のものである。

土坑

SK 6 (第8図)

SK 6は調査区の東端部に位置し1部調査区外に出る。平面プランは不整形を呈し、長径3.32以上×短径1.25m、検出面からの深さは5.0~12.0cmを測る。壁は急傾斜で立ちあがり、床面はほぼ水平な面をなすが、中央部はやや高くなる。なお、南東側に柱根2が遺存し、P 43と共にSK 6を切る。

出土遺物は壺、甕等があるが図示できたのは弥生土器甕(48・49)、壺(50・51)である。他に検出面から出土した板状木製品がある。

SK 7 (第8図)

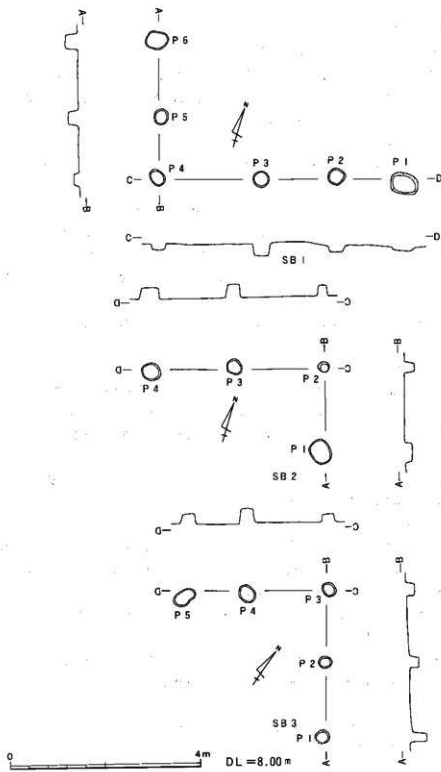
SK 7はSK 6の北東側に隣接し1部調査区外に出る。SK 8を切る。平面プランは不整形を呈し、長径2.75×短径0.98m、検出面からの深さは3.0~6.0cmを測る。壁は東側は急傾斜、西側は緩やかに立ちあがり、床面は、ほぼ水平で中央付近がやや高い。

出土遺物は壺・甕等があるが図示できたのは弥生土器壺(52)のみである。

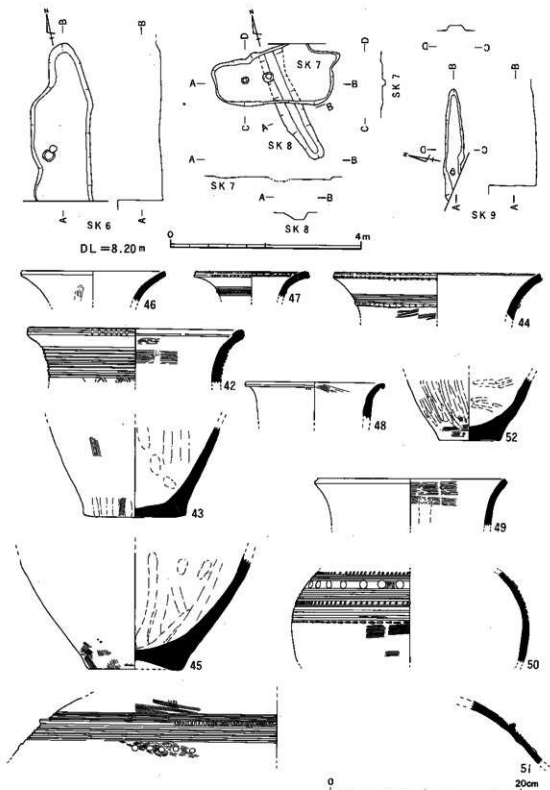
SK 8 (第8・9図)

SK 8はSK 7と直径する形で重複する位置にあり、SK 7に切られる。平面プランは溝状を呈し、長径2.55×短径0.55m、検出面からの深さは約15.0cmを測る。断面逆台形を呈し、床面は水平な面をなす。

出土遺物は壺・甕等があるが図示できたのは、前期の弥生土器甕(55)・壺(53・54)である。他に板状建築材がある。



第7図 AトレンチSB 1~3実測図



第8図 AトレンチSK 6・7、SD 5、P27・34出土遺物及びSK 6～9実測図

SK9 (第8・9図)

SK9はSK6の西側に位置し1部調査区外に出る。平面プランは溝状を呈し、長径2.0以上×短径0.4m、検出面からの深さは5.0～13.0cmを測る。断面逆台形を呈し、床面は凹凸がみられる。

出土遺物は壺等があるが少量で図示できたのは、前期の弥生土器壺(56・57)である。他に不明獣骨がある。

SK10 (第9図)

SK10はSB2の北東側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径1.1×短径1.0m、検出面からの深さは7.0～10.0cmを測る。断面逆台形を呈し、床面は水平な面をなす。なお柱痕が検出されたが先後関係については不明である。

出土遺物は少量で図示できたのは、前期の弥生土器甕(58・59)のみである。

SK12 (第9図)

SK12は調査区の中央よりやや西に位置し1部調査区外に出る。平面プランは溝状を呈し、長径3.35以上×短径0.66m、検出面からの深さは14.0～20.0cmを測る。断面逆台形を呈し、床面は中央部が凹む。

出土遺物は、図示できたのは、前期の弥生土器甕(60～62)、壺(63～64)である。他に猪下顎骨・牙、その他不明獣骨がある。

SK13 (第9図)

SK13はSK15の西側に位置し、SB3と重複関係にあるが、先後関係は不明である。またP116、117に切られる。平面プランは不整形を呈し、長径2.3×短径0.55m、検出面からの深さは7.0～15.0cmを測る。断面逆台形を呈し、床面は水平な面をなすが、東側は1段高い床面を呈す。

出土遺物は、少量で図示できたのは弥生土器甕蓋(65)のみである。

SK15 (第10・12図)

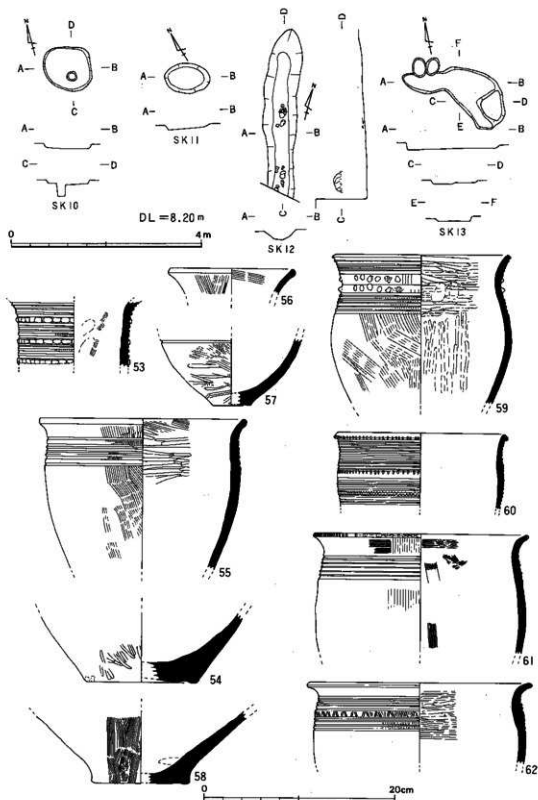
SK15はSK12とSK13とのほぼ中間に位置し、1部調査区外に出る。平面プランは楕円形を呈し、長径3.1以上×短径1.3m、検出面からの深さは約30.0cmを測る。断面逆台形を呈し、底面は水平な面をなす。

出土遺物は、壺、甕、蓋等があるが図示できたのは、弥生土器甕(68～70)、壺(66)、蓋(71)である。他に鹿下顎骨、その他不明獣骨等がある。

SK31 (第10図)

SK31は調査区の東端部に位置し、平面プランは半楕円形を呈す。削平の結果と考えられる。長径0.9以上×短径1.0m、検出面からの深さは10.0～13.0cmを測る。断面逆台形を呈し、床面は水平な面をなす。

出土遺物は、甕、蓋等があるが細片で図示できなかった。他に、不明獣骨、瓢箪、杵、炭化



第9図 AトレンチSK 8~10・12出土遺物及びSK 10~13実測図

米等が出土している。

SK34 (第11図)

SK34は調査区の西端に位置し、大部分が調査区外に出るため形態や規模は把握できないがSD8に切られる。検出面からの深さは4.0~6.0cmを測る。

出土遺物は少量で図示できたのは、弥生土器甕(72)のみである。

溝

SD9 (第11図)

SD9は調査区の西端に位置し、SD8に切られて調査区外に出る。長さ3.80m以上、幅33.0~65.0cm、検出面からの深さは7.3~12.2cmを測る。断面逆台形を呈す。北東端は検出できなかったが削平の結果と考えられる。標高差は7.5cmを測り、やや南西部が低い。

出土遺物は少量で図示できたのは弥生壺(73)のみである。

柱穴

P40 (第11図)

P40は調査区の北東端に位置し一部調査区外に出る。平面プランは不整形を呈すと考えられる。直径62.0cm、検出面からの深さ20.0cmを測る。直径17.0cmの柱根が遺存する。柱根の下(検出面から約14cm)で礎盤として用いた壺底部と接する。

出土遺物は少量で図示できたのは礎盤として転用された壺(74)のみである。

P43 (第11図)

P43はP40の南西側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径25.0cm、検出面からの深さ15.7cmを測る。柱根2に切られる。

出土遺物は少量で図示できたのは弥生壺(75)のみである。

P93 (第11図)

P93はSK10の北側に位置する。平面プランは楕円形を呈す。直径24~34cm、検出面からの深さ13.8cmを測る。

出土遺物は細片で少量であり図示できたのは弥生土器壺(76)のみである。

P103 (第11図)

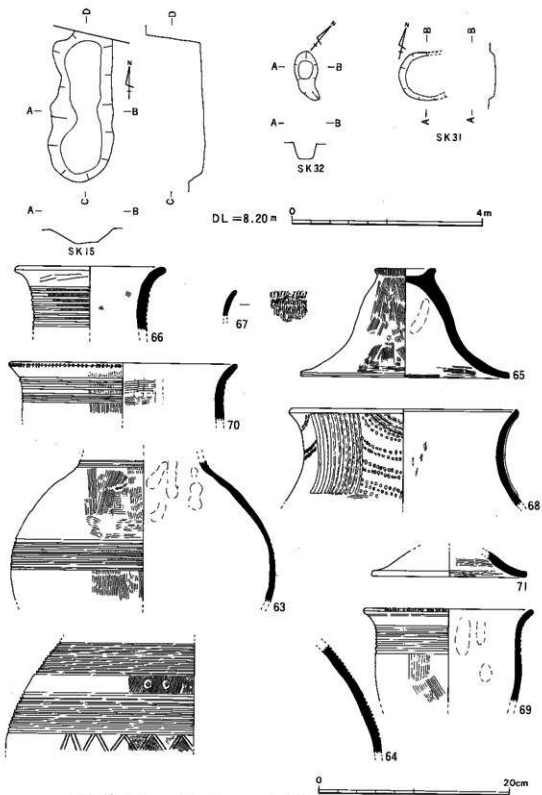
P103はSK13の南側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径40.0cm、検出面からの深さ36.9cmを測る。SB3と重複関係にあるが先後関係は不明である。

出土遺物は細片で少量であり図示できたのは弥生土器壺(77)のみである。

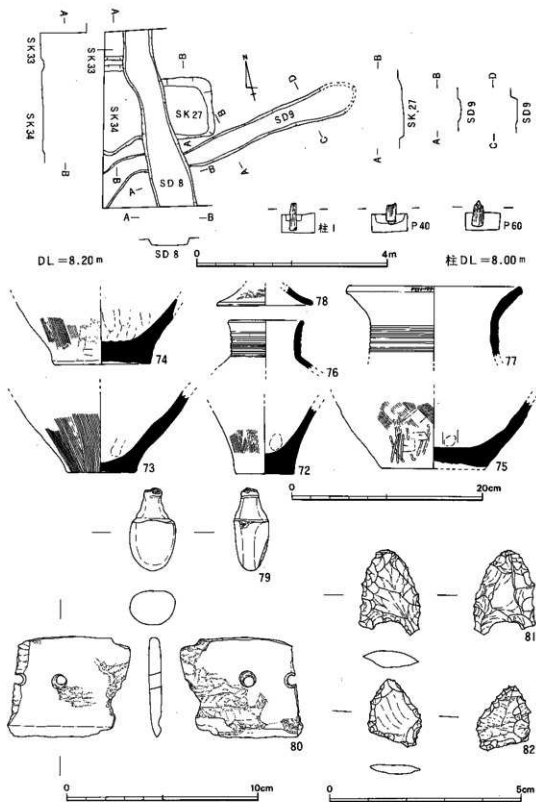
P309 (第11図)

P309はSK32の北東側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、2つの柱穴が切り合っている可能性がある。直径18.0~32.0cm、検出面からの深さ21.0cmを測る。

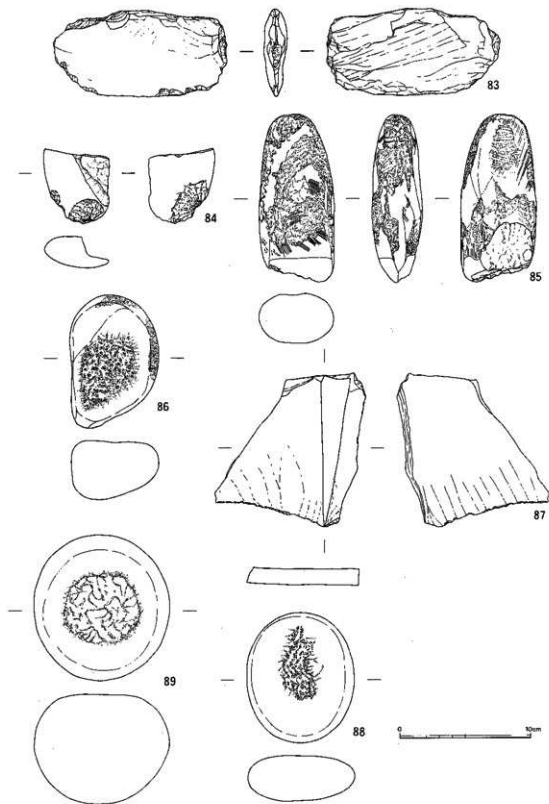
出土遺物は細片で少量であり図示できたのは弥生土器壺蓋(78)のみである。



第10図 AトレンチSK12・13・15出土遺物及びSK15・31・32実測図



第11図 AトレンチSD1・5、SK34、P40・43・93・103・309出土遺物
 及びSK27・33・34、SD8・9、P40・60、柱1実測図



第12図 AトレンチSD 5、SK15出土遺物実測図

その他

以上の他にSK11、27、32、33がある。

遺構	深 さ	長 径 × 短 径	時 期
SK 1	16.0 (m)	(2.45) × (0.63) (m)	中 期
SK 2	12.0~15.0	(2.25) × 0.97	中 期
SK 3	12.0	(0.60) × 0.40	中 期
SK 4	10.0	1.35 × (0.43)	中 期
SK 5	10.0~13.0	1.30 × 0.75	中 期
SK 6	5.0~12.0	(3.32) × 1.25	前 期
SK 7	3.0~ 6.0	2.75 × 0.98	前 期
SK 8	15.0	2.55 × 0.52	前 期
SK 9	3.0~13.0	(2.0) × 0.40	前 期
SK10	7.0~10.0	1.10 × 1.00	前 期
SK11	5.0~10.0	0.95 × 0.65	前 期
SK12	14.0~20.0	(3.35) × 0.66	前 期
SK13	7.0~15.0	2.30 × 0.55	中 期
SK14	10.0~20.0	(2.35) × 1.87	中 期
SK15	30.0	(3.10) × 1.30	前 期
SK27	8.0~10.0	1.28 × (0.95)	前 期
SK31	10.0~13.0	(0.9) × 1.0	前 期
SK32	32.0~35.0	1.2 × 0.5	前 期
SK33	5.0	(0.6) × 0.4	前 期
SK34	4.0~ 6.0	1.83 × (0.78)	前 期
SK35	4.3~13.0	2.9 × 0.48	中 期
SX 1	2.0~14.0	2.0 × 1.37	中 期
SX 2	3.0~10.0	1.53 × 0.97	中 期
SX 3	2.0~18.0	(1.65) × (1.15)	中 期
SX 4	16.0	0.88 × 0.70	中 期

遺 構	長 さ	幅	深 さ	時 期
SD 1	(3.95) (m)	0.85~1.8 (m)	12.5~18.4 (m)	中期初
SD 3 a	(1.25)	0.48~0.65	28.4~36.1	中 期
SD 3 b	(2.95)	0.30~0.55	3.3~18.1	中 期
SD 4	(4.00)	0.95~1.30	29.3~36.7	中 期
SD 5	(4.45)	1.90~2.40	13.4~21.3	中期初
SD 8	(3.80)	1.20~9.80	58.0~85.0	前 期
SD 9	(3.80)	0.33~0.65	9.3~12.2	前 期

表-1 Aトレンチ SK・SX・SD 法量一覽

2. Bトレンチ

Bトレンチの遺構は、上層で掘立柱建物1棟、土坑9基、溝2条、柱穴多数を検出した。埋土は特にことわりのない場合上層は淡暗灰色粘質土単純一層であり、下層は黒色粘土単純一層である。また遺構の組み合わせやその変遷については次章に譲る。

上層

掘立柱建物

SB4 (第14図)

SB4は調査区の東部に位置し半分以上が調査区外に出る。建物は3間(3.12m)以上×3間(3.25m)以上の規模で、長軸は不明である。柱穴の平面は、円形を呈し、直径は、19.0~40.0cm、検出面からの深さは10.6~28.7cmを測る。柱間距離は、0.82~1.17m間となっている。SK22・SK23・SK39・SD6・7と重複関係にある。SK23・SK39を切るが、他は先後関係は不明である。

出土遺物は少量で図示できたのはP3から出土した弥生土器甕蓋(90)のみである。

土坑

SK21 (第14図)

SK21は調査区のはほぼ中央に位置し、北側は調査区外に出る。またP147に切られることから形態及び規模は不明であるが、検出面からの深さは、14.0mを測る。断面は逆台形を呈すと考えられ、床面は水平な面をなす。

出土遺物は少量で図示できたのは弥生土器壺(91)のみである。

SK22 (第14図)

SK22は調査区の中央よりやや東側、SK39の西側に位置する。南部は一部調査区外に出る。平面プランは不整形を呈すと考えられ、長径1.90以上×短径1.0m、検出面からの深さ10.0cmを測る。断面は逆台形を呈すと考えられ、床面は水平な面をなす。SB4と重複関係にあるが先後関係は不明である。

出土遺物は少量で図示できたのは弥生土器壺(92・93)のみである。

SK23 (第14図)

SK23はSK39の東南側に隣接して位置しSB4に切られる。平面プランは楕円形を呈す。長径1.48×短径1.03m、検出面からの深さは15.0~20.0cmを測る。断面は逆台形を呈し、床面は水平な面をなす。埋土はI層：暗灰褐色粘質土、II層：濃茶色腐植土である。SB4に切られる。

出土遺物は少量で図示できたのは弥生土器壺(94)のみである。

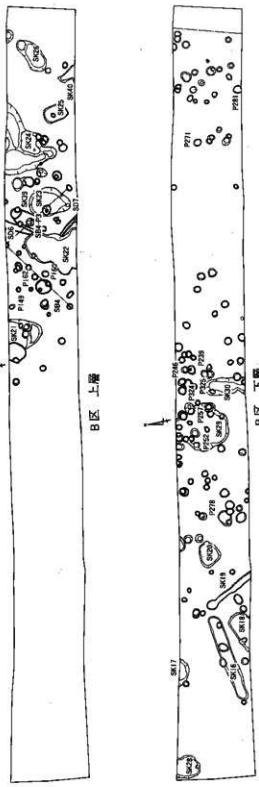
SK24 (第15図)

SK24はSK23の東側に位置し、北側は調査区外に出る。平面プランは不整形を呈すと考えられ、長径2.63×短径1.85m以上、検出面からの深さは10.0~20.0mを測る。断面は舟底状を

- IV層：灰褐色砂レキ層
- V層：黄灰色褐色粘土（原生中期土層包含層）
- VI層：黒褐色粘土（原生前期土層包含層）
- 区層：黄褐色粘土（粘質砂面）
- 区層：原生中期土層包含層
- I層：耕作土
- II層：灰黄色粘質土（田耕作土）
- III層：黄灰色粘質土
- III'層：淡灰色粘質土
- IV層：淡灰色シルト層
- V層：黄灰色粘土層（原生中期土層包含層）
- V層：茶灰色粘質土に大小の砂レキを含む。



- c：黒褐色粘質土
- d：茶色腐植土 (SK28埋土I層)
- e：灰黄色シルト層
- f：黄褐色砂レキ層
- g：黄褐色粘質土 (SK28埋土II層)



第110図 Bトレンチの基本層序と検出遺構全体図

呈すが西側が僅かに下がる。埋土はⅠ層：暗灰褐色粘質土、Ⅱ層：濃茶色腐植土、Ⅲ層：暗灰色粘土である。

出土遺物は、弥生土器鉢（96・97）、甕（95）、土器転用紡錘車（98）がある。他に不明獣骨がある。

柱穴

P149・160・162は共に床面に広葉樹の木葉を敷く。計測表は次の通りである。

柱 穴	直 径	検出面からの深さ	平面プラン
P149	21.00 (cm)	14.5 (cm)	円形
P160	26.00	40.2	円形
P162	23.00	31.0	円形

表-2 柱穴測量

その他

以上の他に、SK25・26・39・40・SD7・8がある。

下層

土坑

SK16 (第15図)

SK16は調査区の西部に位置する。平面プランは溝状を呈す。長径3.2×短径0.45m、検出面からの深さは7.0~10.0cmを測る。断面は逆台形を呈す。床面は水平な面をなす。P128・223・224に切られる。

出土遺物は弥生土器甕があるが、細片で図示できなかつた。

SK18 (第15図)

SK18はSK16の西東側に位置し、南西側は調査区外に出る。平面プランは隅丸方形を呈すと考えられる。長径0.9以上×短径0.77m、検出面からの深さは5.0~7.0cmを測る。断面は逆台形を呈すと考えられる。床面は水平な面をなす。

出土遺物は細片で図示できなかつたが、いずれも前期のものである。

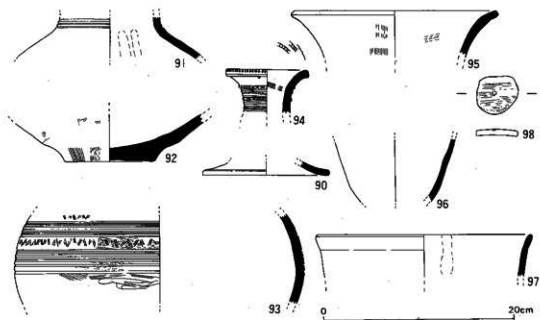
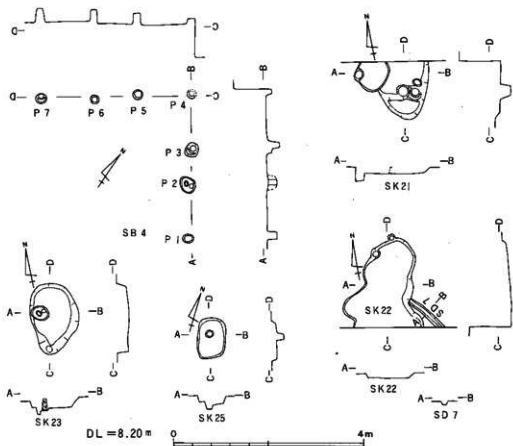
SK19 (第15図)

SK19はSK18の北東側に位置し、南東側は調査区外に出る。平面プランは溝状を呈し、北西端部は柱穴に切られる。先後関係は不明である。長径2.0以上×短径0.25m、検出面からの深さは6.0cmを測る。断面は逆台形を呈すと考えられる。床面は水平な面をなす。

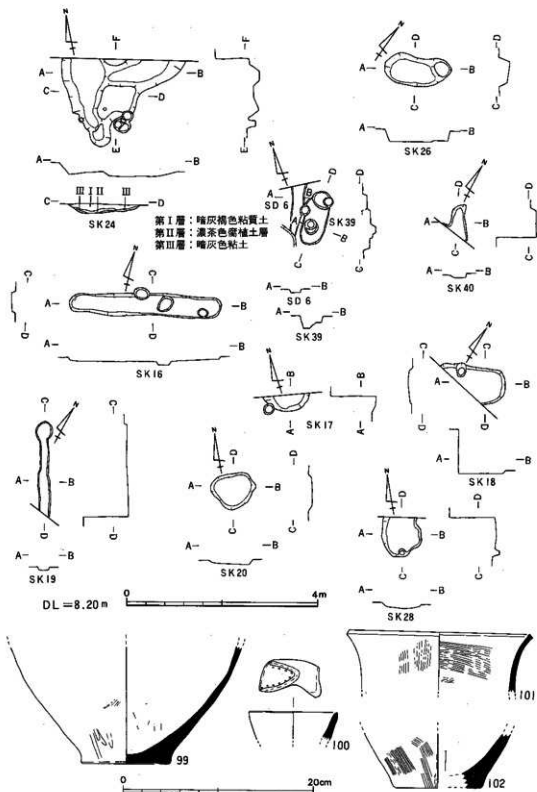
出土遺物は細片で図示できたのは弥生土器壺（99・100）である。

SK28 (第15図)

SK28は調査区の西端に位置し、北側は調査区外に出る。平面プランは不整形を呈すと考えられる。長径0.83以上×短径0.83m、検出面からの深さ5.0~10.0cmを測る。断面は舟底状を呈



第14図 BトレンチSK21~24、P190出土遺物及びSB 4、SK21~23・25、SD 7実測図



第15図 Bトレンチ SK 19・28出土遺物及び SK 16~20・24・26・28・39・40、SD 6実測図

す。床面は凹状を呈す。埋土はⅠ層：茶色腐植土、Ⅱ層：黒褐色粘土である。

出土遺物は少量で図示できたのは弥生土器甕（101・102）のみである。他に不明獣骨がある。

SK29（第16図）

SK29は調査区のはほぼ中央に位置し、北側は一部調査区外に出る。平面プランは楕円形を呈すと考えられる。長径1.9以上×短径1.72m、検出面からの深さは10.0～20.0cmを測る。断面舟底状を呈す。床面は中央が凹む。柱穴P269を伴うと考えられる。P269の平面プランは楕円形を呈し、直径22.0cm、床面からの深さ15.8cmを測る。土坑の埋土はⅠ層：茶色腐植土、Ⅱ層：黒褐色粘土である。P257～264、P266～268、P307に切られる。

出土遺物は少量で図示できたのは弥生土器甕（103・104）のみである。

SK30（第16図）

SK30はSK29の南東側に位置し、南側は調査区外に出る。平面プランは溝状を呈すと考えられる。長径1.45以上×短径0.64m、検出面からの深さは10.0～17.0cmを測る。断面は舟底状を呈す。床面は中央が凹む。

出土遺物は少量で図示できたのは砥石（109）、扁平片刃石斧（108）である。

柱穴

P271（第16図）

P271は調査区の西部に位置する。平面プランは円形を呈す。直径29.00cm、検出面からの深さ20.9cm、埋土は黒褐色粘土単純一層である。

出土遺物は細片が少量で図示できたのは、検出面から約9.5cmで出土した扁平片刃石斧（110）である。

P278（第16図）

P278はSK20の東側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径29.0cm、検出面からの深さ33.6cm、埋土は黒褐色粘土単純一層である。

出土遺物は細片が少量で図示できたのは、検出面で出土した弥生土器壺（105）のみである。他に床面から柱状木器が出土している。

P281（第16図）

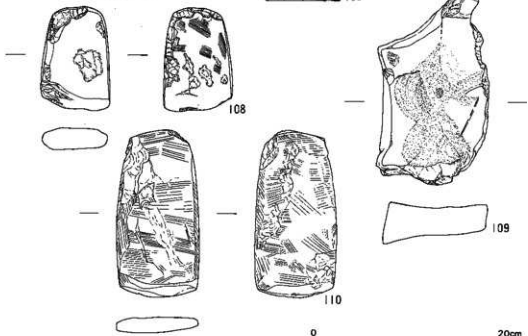
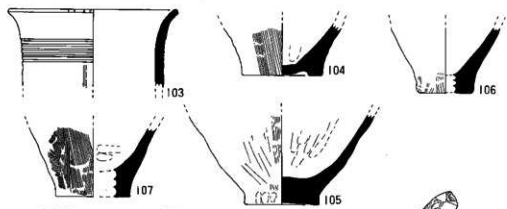
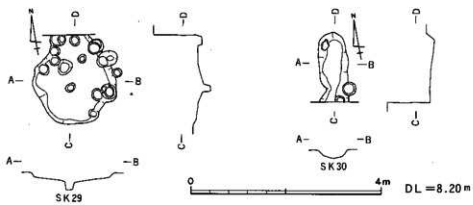
P281は調査区の西端部に位置する。一部調査区外に出るが平面プランは楕円形を呈すと考えられる。直径30.0cm以上、検出面からの深さ14.3cmを測る。埋土は灰褐色砂礫土単純一層である。

出土遺物は少量で図示できたのは弥生土器甕（106）のみである。

P239・246・252・257・324・325（第13図）

P239・246・252・257・324・325は床面に広葉樹の木葉が敷かれていた。計測値は表-3のとおりである。

川土遺物はいずれも細片で図示できたのはP325から出土した弥生土器甕（107）のみである。



第16図 BトレンチSK 29・30、P 271・278・281・325出土遺物及びSK 29・30実測図

柱 穴	直 径	検出面からの深さ	平面プラン
P 239	33.0 (cm)	17.9 (cm)	楕円形
P 246	31.0	33.7	楕円形
P 252	24.0	20.0	円 形
P 257	28.0	46.0	楕円形
P 324	36.0	33.6	楕円形
P 325	26.0	39.0	楕円形

表-3 柱穴法量

その他

以上の他にSK17・20、SD6・7がある。

遺 構	深 さ	長 径 × 短 径	時 期
SK16	7.0~10.0 (cm)	3.20 × 0.45 (m)	前 期
SK17	7.0~ 9.0	0.97 × (0.34)	前 期
SK18	5.0~ 7.0	(0.90) × 0.77	前 期
SK19	6.0	(2.0) × 0.25	前 期
SK20	5.0~10.0	0.96 × 0.77	前 期
SK21	14.0	(1.20) × (1.20)	中 期
SK22	10.0	(1.90) × 1.0	中 期
SK23	15.0~20.0	1.48 × 1.03	中 期
SK24	10.0~20.0	(2.05) × (0.75)	中 期
SK25	13.0~20.0	0.85 × 0.60	中 期
SK26	22.0~25.0	1.38 × 0.63	中 期
SK28	5.0~10.0	(0.83) × 0.83	前 期
SK29	10.0~20.0	(1.90) × 1.72	前 期
SK30	10.0~17.0	(1.45) × 0.64	前 期
SK39	14.0~19.0	1.18 × 0.5	中 期
SK40	5.0~10.0	(0.63) × 0.34	中 期

※SK38は欠番

遺 構	長 さ	幅	深 さ	時 期
SD 6	(1.05) (m)	0.15~0.30 (m)	4.0~ 9.5 (cm)	中 期
SD 7	(0.90)	0.11~0.14	5.7~ 7.00	中 期

表-4 Bトレンチ SK・SD 一覧

第VI章 考 察

1 遺物

(1) 弥生土器

今次調査では、遺物包含層及び遺構からコンテナケース100箱余りの弥生土器を得ることができた。これらの弥生土器は、前期末から中期前葉に属するものであり、本泉の弥生土器編年に照応させれば、前期Ⅳ₍₁₎、中期Ⅰ古・新、中期Ⅱ古₍₂₎に属し、学史的には大塚式₍₃₎、田村式₍₄₎、城式₍₅₎に該当させることができる。また畿内の編年では、第Ⅰ様式新段階、第Ⅱ様式、第Ⅲ様式古段階に併行させることが可能である。ここでは、出土土器を前期と中期とに分け、各々器種毎に型式分類を行い、弥生文化の生成、展開期に、周辺地域として位置付けられる下分遺跡遺物の弥生土器の諸特徴を明らかにしたい。

① 前期土器

前期土器は、遺物包含層Ⅴ～Ⅷ、遺構から出土している。器種構成は、壺・甕・鉢・蓋である。これらの構成比を純粋な前期包含層であるⅧ層と前期遺構出土土器から見れば、壺41点(33.1%)、甕81点(65.3%)、蓋6点(5.3%)、鉢1点(0.8%)である。以下Ⅴ～Ⅷ層中出土の前期土器も含めて、各器種毎に型式分類を行う。なおこの時期から中期にかけては、各種の突帯文が盛行することから表-5のような分類を行う。また、これらの土器は胎土によって、一般的なものと特殊なものに分けることができる。後者は前者に比べて器壁が薄く焼成堅緻なものが多い。泉中央部よりも西部にその中心的な分布圏があり、前期末から中央部・東部でも見られるようになる。当遺跡における後者の構成率は数パーセントに過ぎないが、前者をⅠ群の土器、後者をⅡ群の土器として扱う。なお文章中においては、煩雑さを避けるために後者の説明にのみⅡ群土器という表現を使用し、前者の土器については、特に必要なとき以外はⅠ群の土器という表現はしない。

a 壺

⑥ 広口壺

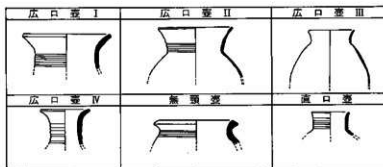
壺の中で最も多くを占めるものである。体部の形態は、球形に近いものや卵倒形・無花果状を呈するものがあるが、口頸部は概して漏斗状に外反する。Ⅰ～Ⅴに分類できる。

Ⅰ類：口縁部が頸部から漏斗状に外反し、頸部外面にはへら描直線や突帯A・B・C・D・Gで飾られる。口縁部内部にも突帯AをⅠ～数条巡ぐらすものがある。突帯では、A

突帯文の種別	内 容
A	前期末から中期Ⅰにかけて一般的に見られる。扁平な突帯で、指環でつまみ出し、刻目状を呈するものが多いが、へら状原体で削むものも少量ある。
B	中期Ⅰ～Ⅱにかけて見られる小突帯で、磨行後上下から指環でつまみ出すものもある。
C	断面マゴロコ状をなす刻目突帯で、刻目はへらかきで容易に擦除可能が見られる。
D	断面三角形を呈する太い突帯で、爪押の圧痕を伴う。
E	断面三角形を呈する太い突帯で、刻目をたない。上下に貫通する小孔を穿つものが多い。
F	幅広く厚手の突帯で擦磨で再圧する。中期Ⅱ以降に属する。Bよりも更に粗いもので、擦磨痕帯として小突帯と区別する。
G	

表-5 突帯文各種

が最も多く使われる。口唇部は、丸くおさめるものと外傾する面をなすものがあり、後者の中には、わずかに上下に拡張せられるもの(34)もある。また口唇部に刻



第17図 前期壺型式分類

目を施す例(34・77)もあるが後述する中期Ⅰに比べると使用頻度は、はるかに少ない。

胴部文様としては、ヘラ描直線が多用され、数条を単位とする帯状沈線(93・63・64)も見られる。この他双線による山形文(64・93)や刺突文(50)・円形浮文(50・51・64)も施文される。また、まれに口縁部内面に100のような粘土帯を貼付するものもある。この他試掘調査では、鋤先状口縁を呈するものも少量見られた。

器面調整は、胴部上半と口頸部内外面はハケ調整、胴部下半外面はヘラミガキで仕上げている。しかしヘラミガキは、丁寧とは言えずところどころに下地のハケが見られる。

I類に属するものは、上記の他に27・46・53・56・113を挙げるができる。

II類：球形状をなす上胴部に、ゆるやかなカーブを描く口頸部がつくもので、I類に比べて口径が大きい。頸部外面には多条化したヘラ描直線を配し、その下に刺突文(114)や双線による山形文(42)を配するものが見られる。この他突帯Aが多く使われる。口唇部は、丸くおさめるものが多く内外面に刻目を施すもの(114)や鋤先状口縁の外面にヘラ描直線と刻目を巡らす例(42)もある。全体の器面調整を知ることはできないが、口頸部外面はタテ方向、口縁部内面はヨコ方向のハケ調整を施す。

III類：卵倒形の胴部から、外反する短い口頸部を有する。図示できるものはなかった。

IV類：長く伸びる頸部から口縁部が漏斗状に外反する。口頸部外面には、ヘラ描直線と突帯Aが多用される。口縁部内面には、突帯A(94)や突帯C(24)が貼付されるものもある。また口縁部には、貫通する小孔が穿たれる例が多いが、必ず内側から外側へ穿孔せられる。口唇部は、丸くおさめるものと外傾する凹状の面をなすものがあるが、後者は上下端に刻目を配するもの(45)がある。

V類：胴部上端に比較の明瞭な肩部変換線をもち、口頸部は漏斗状に外反する。上胴部や口縁部外面に突帯B・Gを貼付する。V類は、II群土器に属するものが多く後述する壺II類と分別し難いものもあり、将来は壺として扱わなければならないかも知れない。図化し得るものはない。

⑥ 無頸壺

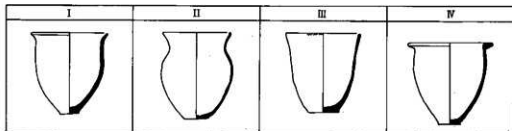
胴部以下の形状は不明であるが、短く外反する口縁部を有し口唇部は幅広い外傾する面をな

す。上胸部には、ヘラ描直線を数条配す。111のみである。

◎ 直口壺

口頸部が直立し口唇部は丸くおさめる。頸部外面には多条化したヘラ描直線を配するもの(76)や突帯Aや刺突文を施文するものもある。

b 壺



第18図 前期壺型式分類

I類：いわゆる如意状口縁を有するものである。上胸部外面には4～7状までのヘラ描直線を施し、中には帯状沈線を上下2帯配し間に双線山形文を巡らすもの(62)がある。口唇部は丸くおさめ、刻目を施すものと施さないものがある。I類は、62の他に16・55・61・69・70・103・16がある。

II類：わずかに内湾する上胸部から、不明瞭な肩部変換線をもち口頸部が外反する。最大径を上胸部に有するものが多い。また肩部の上部とそれ以下とは、外面の器面調整方法が異なる場合がある。諸特徴によってIIAからIIEに細分することができる。II-A類は、口頸部及び上胸部外面にヘラ描直線を施すもので、中には59や127のように沈線帯間に瘤状突起や刺突文を配するものがある。器面調整は、外面が木理の粗いハケ調整、内面はヘラミガキを施す。II-B類は、外面無文(23・30・49・101)、上胸部外面に断面カマボコ状の太い沈線を押し引き風に施文するもの(17)、口頸部外面に突帯Gや瘤状浮文を貼付する(68)がある。68は他例に比べて肩部の変換線が明瞭と考えられる。II-C類は口唇部に刻目を施すもの、II-D類は口縁部外面に、C突帯を貼付するものである。

III類：口頸部が直立、あるいは僅かに外反する。刻目の有・無によってA・Bに分けることができる。III-A類の117は、口唇部全面に鋭く深い刻目を施し、118は突帯を意識したもので、強くつまみ出した口唇部下端に刻目を施している。また前者は、上胸部に幅広い押し引き風の沈線を施す。III-B類も口唇部下端を強くつまみ出している。細片であれば、III類と区別し難い。

IV類：いわゆる逆L字状口縁を有するものである。口縁部は、直角に折り曲げたもの(8、22)と三角形の太い粘土帯を貼付(5・60・128)したものがある。上胸部外面には例外なくヘラ描直線が施され、最高18条まで数える。その他沈線帯の下や沈線帯間に刺突文を配するもの(8・60)が見られる。口唇部にはやや密な刻目が施されている。器面調整は、外面タテ

方向のハケ調整、口頸部内面はヨコ方向のハケ調整を施す。

壺口縁部には、以上の他に紀伊型と目されるもの(48)が出土している。

c 鉢

確実に前期と判る鉢は1例(161)のみである。口縁部に断面三角形の粘土帯を貼付し、外面は木理の粗いハケ調整を施す。

d 蓋

すべて壺の蓋である。図示できたものは2例(71・78)であるが、共につまみ部は欠損している。外面は共にハケ調整である。57の口縁部内面にはヘラミガキが施され、2cm幅で環状にススけている。

以上前期土器について主に口頸部の形態から分類を行った。次に文様について見ると、この時期に使用せられる文様は、ヘラ描直線・双線による山形文・刺突文・円形浮文・瘤状浮文・表一5に記した各種突帯等がある。ヘラ描直線が最も多いが、この中にはすでに見たように、数条まとめた沈線帯を散帯施すものも見られる。また壺17・117のようなヘラとは全く異なる原体を用いた太い押し風文の沈線がある。一般的なヘラ描直線が、両脇に堤を残すのに対して、この言わば「特殊な沈線」は、堤をほとんど残さないという特徴を持っている。このような「特殊な沈線」は、田村前期Ⅲの段階までは全く見られなかったものであり、類例としては美良布遺跡出土の細片⁽¹⁾を挙げるのできるのみで、今後その出自の背景が注目されるところである。

ヘラ描直線文は、それのみで文様帯を構成する場合もあるが、他の文様はほとんどの場合2種・3種あるいわそれ以上が組み合わせって一個の土器の文様を構成する。2種・3種の文様の組み合わせの主なものとその使用頻度を表わすと表一6のようになる。2種の組み合わせではヘラ描直線+突帯Aが最も多く198点を占め、以下ヘラ描直線文をベースにしたが、双線山形文、刺突文、突帯Cが多く見られる。9例見られるヘラ描直線と突帯Dの組み合わせを持つ土器は、胎土・色調がⅠ・Ⅱ群の土器とは異っており、中部瀬戸内地方からの搬入品と考えられる。

次に個々の文様について見ると、先ずヘラ描直線文は、前期Ⅰ・Ⅱ段階に少量使われ、前期Ⅲ段階に至って少条の「区分文様」⁽²⁾として一般化し、更に当該期に見られる多条化は、すでに

文様の組み合わせ		点数
ヘラ描直線文 + 双線山形文		105
" + " 刺突文		3
" + " 突帯A		91
" + " 突帯C		141
" + " D		9
" + " E		5
" + " 浮文		13
ヘラ描直線文+双線山形文+刺突文		3
" + " + 突帯A		6
" + 突帯A + " C		4
" + " + " B		2

表一6 前期土器 文様の組み合わせ

「区分紋様から帯条紋帯への変質」⁽³⁾を遂げた段階のものである。従ってこのことは、当遺跡の前期Ⅲ段階の土器が、広く西日本の九州以外の地域の動向と軌を一にしていたことを示すものである。次に突帯Aは、前期Ⅲに至り突如出現するものであり、しかも壺にのみ使用されるところにも特徴がある。突帯が極めて扁平であることや指頭でつまみ出すところに南四国の地域的特色が見られるが、当該期の中部瀬戸内の阿片式はじめ東部瀬戸内・近畿地方に盛行を見せ

る刻目突帯と同様の現象として把握することができよう。双線による山形文は、今里幾次氏の言う半截竹管状施工具によるもので、同氏が「晩期縄文土器からの伝統」により「波状文にまで導き出した功績」を解くものである。この文様も洪中・四国、近畿地方に見られるものである。刻突文と大型の円形浮文は、当該期瀬戸内・播磨地方に盛行するものである。後者については、南四国中期Ⅱの文様として知られていたものであり、前期に遡る例は本例が最初である。また、甕Ⅱ-B類に貼付される大小の瘤状浮文は、管見の限りでは他の類例を知らず当遺跡独特の文様とすることができる。

次に器面調整について述べると、壺・甕共にハケ調整が多様されることを第一の特徴として挙げることができる。ヘラミガキは壺の胴部中位以下、甕Ⅱ-A類とⅠ類の一部の内面に見られるのみである。また試掘調査時に出土した甕胴部外面に見られた擦痕状の荒いナゲ調整の好例を得ることはできなかったが、壺底部2と105の下部外面には、ハケ調整の下地に下→上のヘラ削りが見られる。また底部外面の中にも削りの認められるものが混在している。

成形手法の中で、粘土帯接合部を観察できる資料は少なかったが、甕Ⅱ-B類に属する30が、内傾接合である点は注目しなければならない。

以上、各器種毎の型式分類、文様・調整の特徴について述べた。これをもとに各器種別にその特徴を抽出し、当遺跡の前期Ⅱ段階に見られる土器の様式的特徴を明らかにしたい。(表-7参照)

壺は、広口壺が90%以上を占め中でもⅠ類が68.3%を占める。Ⅰ類は系譜的にはいわゆる遠賀川式土器の延長線上に位置付けられるものであるが、その形態はかなり変質している。すなわち長頸化と口縁部の著しい発達が見られる。またⅡ~Ⅳ類や直口壺の存在は、前期Ⅱ段階までかなり強固に守られていた斉一性の崩壊による壺の器種分化として把握することができよう。

甕は、紀伊型としたⅠ例を除くとⅠ~Ⅳ類から構成され、Ⅰ類とⅡ類が各々43.2%を占めている。田村遺跡群で示された南四国の前期甕の構成は、突帯文系と遠賀川系がほぼ1:1で共存する前期Ⅰ段階を除くと、それに続くⅡ・Ⅲ段階はほとんどすべてが遠賀川式土器によって占められている。当該期に至って突如出現するⅡ類は、遠賀川式土器の発展、分化現象として位置付けることができないものであり、「土器文化」と言う視点から見れば、まさに前期Ⅰ段階に見られた突帯文系と遠賀川式土器との共存状況の再発の現象とさえ考えられる。この現象は、Ⅱ・Ⅲ期に属する甕が「劇的な様式転換の基礎を」なした輪積による外傾接合であったのに対して、内傾接合がⅡ類で確認されたことと共に、その歴史的意義と背景に注目しなければならない。当該期が、弥生文化の創造的発展期として位置付けられ、遺跡数

器種	分類	点数	点数
壺	Ⅰ	35 (68.3%)	41
	Ⅱ	2 (4.9%)	
	Ⅲ	2 (4.9%)	
	Ⅳ	6 (14.6%)	
	V	—	
甕	Ⅰ	35 (43.2%)	81
	Ⅱ-A	7 (8.5%)	
	Ⅱ-B	22 (27.1%)	
	Ⅲ-C	6 (7.4%)	
	Ⅲ-D	—	
	Ⅲ-E	—	
	Ⅲ-A	1 (1.2%)	
	Ⅲ-B	—	
	Ⅳ	9 (11.1%)	
	Ⅴ	1 (1.2%)	
計	—	1	0.5%
共	—	7	5.3%
計	—	130	100%

表-7 型式分類別器種構成
(Ⅳ層と前期遺構出土の土器)

が飛躍的に増加する時期であるだけに、なおさら重要と考えられる。

藤尾慎一郎氏は、「土器を通して稲作受容期における諸集団の個別的対応の実態を解明」する中で、「一見、等質的にみえる遠賀川式土器⁽¹⁴⁾」も分布によって「組成・型式学的特徴」のあることを明らかにし、「西日本弥生時代前期土器様式」をA・B・Cの3つのパターンに分けた。南四国に位置する当遺跡の甕のあり方は、「前期中頃まで板付系甕形土器が主体」を占め後半から逆L状口縁の甕が7割を占める中の池遺跡⁽¹⁷⁾で示されたCの地域と共通する現象として把握することができよう。ただし当遺跡では、中の池遺跡の逆L字状口縁に該当する甕はⅡ類であり、型式的には中の池と違いが認められる。この瀬戸内地方と南四国の土器型式の差違は、藤尾氏も述べているように「各地域固有の歴史的独自性」に起因するものと考えられるし、「固有の歴史的独自性」こそ「弥生文化形成期に存在した文化の状況⁽¹⁴⁾」に外ならない。

Ⅱ類甕の存在は今まであまり注目されることがなかったが、後述する「土佐型」甕に連なるもので、当該期に近畿・瀬戸内地方に出現しはじめる地域色の強い甕に照応するものである。かかる甕の存在は、先述の創造的発展と深くかかわっているだけに、その歴史的意義は大きいと言わなければならない。その問題については、後日に期したい。

② 中期土器

中期土器は、遺物包含層Ⅵ～Ⅴ、遺構から出土している。中期Ⅰ・中期Ⅱ（古）の段階に属するものであり、器種構成は、壺・甕・鉢・蓋である。Ⅵ～Ⅴ層中の確突に前期土器と考えられるもの（壺・甕Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類）を削除して器種構成比を見ると壺441点（67.9%）、甕176点（27.2%）、鉢13点（2%）、蓋19点（2.9%）となる。ただし先述したように甕167点の中には、前期と中期とに判断し難いものがかなり含まれており、甕の実際の構成比率は27.6%よりも低いと考えなければならない。

先ず各器種毎に型式分類を行い、各器種を構成する土器型式を明らかにする。その際の分類の大きな目安は前期の例に基づく。各種突帯文、Ⅰ・Ⅱ群土器の表現も同様である。

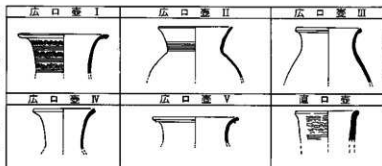
a 壺

① 広口壺

前期と同様で壺の中では最も多く430点の中で426点が広口壺に属する。胴部の形態も球形に近いものと長胴の両者がある。前期との違いは櫛描文の有無が挙げられるが、今一つ大きな基準として、口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚させる手法が突如盛行しはじめることである。型式的な差異によりⅠ～Ⅴ類に分けることができる。また中期ⅠとⅡの区分については可能な限りその都度触れて行く。

Ⅰ類：広口壺の中では最も多くを占めている。口頸部の基本的な形態は前期のものと同ど変わらないが、より長頸化するもの（233）が見られるようになる。約7割が口縁部外面に粘

土帯を貼付し、口縁部を肥厚させている。先ず中期Ⅰ（前半）に属するものは、頸部外面や口縁部内面に突帯Aを貼付させるものが多い。突帯Bは、前期のものに比べると幅が狭く、厚さも更に薄くなっている。また土器本体の胎土と異なった素地を使っているものが多いことも前期と異なる点である。口唇部は、ヨコ方向の強いナデにより凹状を呈し、上・下に刻目を施すものが中期Ⅰをとおして見られる。今次調査では図化し得る良好な資料は少なかったが、欄描直線文が登場する。中期Ⅰ（前半）段階の例として10・35・44・47・142・149中期Ⅰ（後半）に属するものとして6・95・139・146を挙げるができる。



第19図 中期壺型式分類

中期Ⅱ段階のものは、長頸化が進み欄描文で加飾するもの(143)と口頸部にほとんど文様を付けないもの(1, 36・37・115・140・144)がある。幅広い口唇部は凹状をなすが、中期Ⅰのように刻目を施すものはほとんどない。胴部155も当該期のものである。

Ⅰ類：基本的な形態は前期のものと同様である。広口壺の中に占める割合は、1%未満で、図化し得たものは1例(153)のみである。口縁部のつくりはⅠ類と同様であり、頸部外面には複帯構成の欄描直線文と突帯Aを配している。中期Ⅰ（前半）に属する。

Ⅱ類：長い胴部から、短い口頸部が漏斗状に外反するもので、広口壺に占める割合は1%前後である。図化し得たものは2例(40・147)である。両者共に中期Ⅰ・Ⅱのいずれに所属するものか決定し難い。前者は口唇部上下に刻目を配し、後者は口縁部外面に粘土帯を貼付している。

Ⅲ類：長い胴部から、口縁部が漏斗状に外反する。広口壺に占める割合は1%未満である。図化し得たのは1例(32)のみであり、中期のいずれに属するのかわ決定し難い。

Ⅳ類：前期のⅣ類と同様の形態をなしており、Ⅱ類との区別が難しいものがある。口頸部の形態や肩部変換線が明瞭であるところから壺として扱った。11点出土しており、図化し得た2例(9・138)以外はすべてⅡ群の土器に属する。9は、頸部外面に欄描直線2帯を縦に配し区画文とし、中に上弦と下弦の弧文を配し、更に肩部には複帯構成の欄描直線文を施している。後者は、口縁部外面に突帯Bを貼付している。共に中期Ⅰに属する。

Ⅴ類：球形に近い胴部から口頸部が直立するもの。5例出土しているが図化し得たのは2例である。33は、口縁部外面に突帯Cを貼付し、上胴部外面には突帯Dを配し連続刺突をなしている。Ⅰ群の土器である。145は、前期の76のヘラ描直線が欄描に変わったものである。

⑥ 直口壺

球形に近い胴部から口頸部が直立するもの。5例出土しているが図化し得たのは2例である。33は、口縁部外面に突帯Cを貼付し、上胴部外面には突帯Dを配し連続刺突をなしている。Ⅰ群の土器である。145は、前期の76のヘラ描直線が欄描に変わったものである。

b 蓋

前期の型式分類に従うと、Ⅲ-B類が1例ある他はすべてⅡ類で構成されている。口縁部外面の粘土帯貼付の有・無によってA・Bに分ける。

Ⅲ-A類：口縁部外面に粘土帯を貼付しない。口縁部は、無文のもの（2・7・14・15・17）、刻目を施すもの（12）、突帯Cを貼付するもの（129）、突帯Gを貼付するもの（13）がある。その他の文様は、7が頸部にヘラ描直線を、17が上胴部に幅広い押し引き風の沈線を4条配している。また12は頸部外面に双線をタテに5条、129は上胴部に突帯Gを3条、13は4条配している。13・129はⅡ群の土器である。A類は、中期Ⅰ段階に属するが、12・13・129は前期の可能性もある。

Ⅲ-B類：口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚させるものである。口唇部は刻目を施すもの（160）と刻目を施さないもの（130・131・159）がある。130・160は、上胴部に突帯Bを貼付しており、131は、突帯の下にもタテに棒状浮文を施している。131はⅡ群の土器であり、胴部外面中位に叩き目らしきものが認められる。B類は、中期Ⅱ段階に属するものである。

Ⅲ類：1例（4）のみである。口唇部は丸くおさめ、前期のものほどつまみ出さない。頸部間には断面カマボコ状の太い沈線が巡る。

c 鉢

Ⅰ類：直線的に外方に立ち上がるものである。無文のもの（96・97・133）と有文のもの（3）がある。3は、口縁端部をわずかに外方につまみ出している。文様は、口縁部直下に櫛描直線文一帯を巡らし、その下にヘラ描直線4条と上弦の櫛描弧文を配す。下部には下弦の櫛描弧文とヘラ描直線を配している。3の底部は、41のような丸底になる。

Ⅱ類：口縁部が外反するもので、大型の（135）と小型（132）がある。

口縁部の形は不明であるが、鉢と考えられるもの（38）がある3は中期Ⅰ（前半）に属すると考えられるが、他は中期ⅠかⅡか決定し難い。

d 蓋

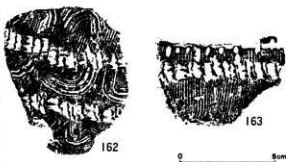
器高の高いもの（65・137）と低いもの（136）があるが、すべて甕の蓋である。137は口縁部内面に粘土帯を貼付しており、65の口唇部にはヘラ描直線が一条巡る。口縁部細片の25・90は器高の高いものに属すると考えられる。口縁部内面には環状に煤が付着している。137は、中期Ⅰに属するが、他例は中期ⅠかⅡかそれとも前期のものか決定し難い。

以上中期Ⅰ上器について主として口類部の形態から分

文様の組み合わせ	点数
櫛描直線文 + 双線山形文	10
" + 刺突文	7
" + 突帯 A	35
" + " D	1
" + " G	2
" + " E	1
" + 櫛描弧文	5
" + 櫛描波状文	56
" + 櫛描環状文	5
櫛描波状文 + 櫛描波状文	7
櫛描直線文 + 櫛描波状文 + 櫛描環状文	4
" + 突帯 A + 双線山形文	2
櫛描環状文 + 櫛描波状文 + 双線山形文 + 突帯 B	1

表-8 中期Ⅰ土器 文様の組み合わせ

類を行った。次に文様、特に櫛描文について若干の考察を行う。今次調査で認められた櫛描文は、直線文・波状文・簾状文・弧文であるが、試掘調査時には流水文も少数例ながら検出されている。これらの櫛描文は、直線文を除くとそれ単独で用いられることはほとんどなく、他の文様とセットで使用される場合が多い。その際、あくまでも直線文が基調と



第20図 土器拓影

なって、他の文様が付属的・補助的に使用されていることが表-8に示した文様の組み合わせからも見て取ることができる。櫛描文間の組み合わせでは、直線文と波状文が最多で56例を数え、簾状文と波状文が7例、直線文と簾状文が5例、三者が同一器面を飾るものは4例を挙げることができる。また櫛描文と他の文様との組み合わせでは、双線による山形文(10例)、突帯A(35例)、刺突文(7例)などを主なものとして挙げる事ができる。

次にこれらの文様及び組み合わせについて時期別に観るとどのように整理されるであろうか。先ず中期Ⅰ段階、これはかつて今里幾次氏によって「原始的櫛目文」と呼称された段階に属するものであり、南四国の諸例については岡本健児氏の諸論考や拙著において触れた通りであり、今次調査においてもその諸見を変更する必要は全くない。ただ新たに明らかになった事象で注目すべき点を挙げておく、①櫛描簾状文について、櫛描簾状文が中期Ⅰ(後半)で出現することはすでに明らかにしているが、上図拓影(第20図)のような稚拙な初原の連簾文は管見の及ぶ範囲では初見である。まさに櫛目文を押し引き風に施文したような痕跡を示している。施文部の砂粒の動きを観ると左→右に動いているが、拓影の2例は不連続のあることを示している。②今1つは、9や141に観られる櫛描原体をを用いた弧文の存在である。かかる施文は、回転運動の原理を無視あるいは軽視したものであり、当地方における初期の櫛描文、あるいは導入期の櫛描施文のあり方を示すものとして、興味深い現象である。先に挙げた櫛描直線文と双線山形文などもその査証となる。

中期Ⅱ段階では、Ⅰ段階にみられたコンパス回転状の波状文Ⅱ_(1,3)が減少し、143・155のような流麗なものに変化する。と同時にⅠ期(後半)には少量しか存在しなかった波状文と直線文を交互に施文する例が急増するようになる。しかし畿内各地に見られるような口唇部を櫛描で飾るものはほとんどない。櫛描文以外の文様として、田村遺跡群では突帯Bが主流を占めているが、当遺跡では以外に少ない。地域差であろうか。今後検討を要する。

主として壺の文様について述べたが、壺では櫛描文を施文するものは1例も確認できなかった。壺における櫛描文の欠如は、当遺跡のみならず田村遺跡群においても同様であり、南四国の中期における壺の特徴と言えよう。

以上、各器種毎に型式分類を行い文様構成の特徴について述べた。以下これらをもとにして、

中期Ⅰ・Ⅱ段階における様式的特徴を明らかにしたい。型式別各器種構成比は表—9に示すとおりである。なお包含層出土の破片のすべてを、中期Ⅰと中期Ⅱ（古）に分別できないところから、ここでは中期前葉の土器の様式的特徴と言うことになる。

壺は、広口壺・直口壺・ミニチュア土器から構成されている。田村遺跡群においては、中期Ⅰ段階の壺を構成する形式は概ね2種類であったが、中期Ⅱ段階になると一挙に5形式に増加しており、壺のバリエーションの増加が一つの特色となって現

器種	分類	点数	点率
壺	Ⅰ	415	94.1%
	Ⅱ	3	0.6%
	Ⅲ	4	0.9%
	Ⅳ	2	0.4%
	Ⅴ	11	2.5%
直口壺	Ⅰ	5	1.1%
	Ⅱ	1	0.2%
壺	Ⅰ	175	99.4%
	Ⅱ	1	0.6%
	Ⅲ	0	0
片		13	2.9%
破		19	4.3%
計		440	100%

表9 型式分類別器種構成

れる。当遺跡においても、そのような現象が見られるが、広口壺Ⅰ類が94.1%をも占めるといいう一型式への偏在傾向が見られる。当遺跡で広口壺Ⅰ類としたものが田村遺跡群ではA類に該当し、やはり壺の中では最多を占めているが、それでも50%以下である。この偏在化は周辺地域の特徴であろうか。

またこの時期の壺は、文様を加飾するところに特徴の一つがあるが、広口壺Ⅰ類に属する203は、全く文様をもっていない。かかる土器は、田村遺跡群L₀₀49のS T 4—4や楠・荒田町遺跡SK16—7などからも同様のものが出土している。他の壺と使用目的が異なるのかも知れない。

南四国の中期土器の大きな特徴の一つに、壺の口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚させる例がある。すでに触れたように当遺跡でも顕著に見られ広口壺の65%前後に達する。致密な比率の推移を示すことはできないが、中期Ⅰよりも中期Ⅱが増加している。

壺は、最も注目すべき分析結果を得ることができた。まず現象の推移を辿ると、Ⅰ類とⅣ類が全く認められず、Ⅲ類の1例（4）を除くとすべてⅡ類に統合されていることである。南四国の中期前葉の壺については、今まで不明瞭な点が多かった。すなわち、中期前葉の壺が欠如しているという一種の奇異なる現象として把握されていた⁽²⁴⁾。田村遺跡群においても、壺に対して数パーセントにも達していない。「奇異なる現象」として映った背景は、「構撰文を有する壺形土器が僅少であるために、抽出が困難という⁽²⁵⁾」ところに原因の1つがあった。すなわち壺に見られた瀬戸内の要素が、壺抽出の際に先入観として認識の内であったからに他ならないのである。中期前葉の壺は、遠賀川系にも瀬戸内系にも属さない前期末のⅡ類壺を導きの糸として得ることができたものである。不明瞭な肩部変換線を有しハケ調整を多用するところのⅡ類壺は、当遺跡独特の型式である。そして現在までこの型式に属するもの多くは、口縁部の粘土帯貼付（Ⅱ—B類）などの事象も手伝って、壺の中に入れられていたのである。今後視点を変えて、資料の見直しをしなければならない。

畿内及びその周辺地域においては、第Ⅱ様式段階に播磨型、和泉型、紀伊型と称される各地域独特の壺が存在している。当Ⅱ類壺の存在は、かかる現象に照応するものとして位置付けることができよう。今後、当該期の南四国を代表する壺として、Ⅱ類壺を「土佐型」と称したい。

「土佐型」の設定によって、南四国の中期前葉の遷欠如という「奇異なる現象」は水解した。「土佐型」出現の背景やその意義及びそこから派生するところの諸問題については、後日に期したい。

この他、131で叩き目らしきものが認められた。南四国で中期Ⅱ段階にまで遡る例は、未確認である。今後の類例を待ちたい。

鉢で注目すべきは、Ⅰ類とⅡ類とから成っている。注目すべきは丸底(3・41)の存在である。前期にも1例(125)存在したが、今次調査において初めて明らかになったものである。このような形態の土器も、周辺部における弥生土器生成期の特徴として把握すべきものである。蓋も全体の中に占める割合は小さいが、それでも田村遺跡群と対比すれば、その存在が目立っている。やはり周辺現象の諸側面の一つであろう。

(2) 紡錘車

3例出土しており共に土器転用のものである。123は前期に属するもので外面にヘラ描直線文と双線山形文が見られる。98は中期のものである。

(3) 石器

① 大型蛤刃石斧(第12図—81)

刃部が大きく欠損している。基部の幅がせまく、体部から刃部へは直線的に移行している。刃部は研磨されているが、体部から基部にかけては調整時の打痕が残っている。全長13.0cm、全幅5.8cm、厚さ3.9cm、重量500gを測る。物部川上流に産するみかぶ緑色岩製である。

② 扁平片刃石斧(第16図—108・110、第21図—164)

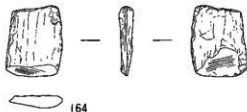
3点出土しておりすべて完形品である。108は、わずかに丸味を帯びた基部から刃部に向かって少しづつその幅を増している。全面に研磨が施され、後主面には研磨の際の条線が走る。刃部は左半分が著しく消耗している。使用方法と関係があるものと考えられる。全長5.5cm、全幅3.7cm、厚さ1.2cm、重量40gを測る。粘板岩である。110は、短冊形を呈し前主面が凹状をなしている。全面丁寧に研磨され両主面にはヨコ方向の条線が走る。全長8.8cm、全幅4.4cm、厚さ0.8cm、重量67.1gを測る。粘板岩製である。164は、基部が欠損している。現存長3.7cm、幅2.9cm、厚さ0.8cm、重量12.9gを測る。三波川帯に産する緑色片岩製である。108・110は、前期に属するものであり、164は中期のものである。

③ 石包丁(第11図—80、第12図—83)

80は、両脇が大きく欠損している。直線刃両刃で背部はわずかに内湾している。全面丁寧に研磨され、両面から2孔を穿っている。幅5.3cm、厚さ0.7cm、重量33.2gを測る。粘板岩製で、中期に属する。83は、打製石包丁である。一方の主面には自然面が残り他方の主面には剝離面が残る。刃部をつくり出しているような痕は認められない。全長13.4cm、全幅6.8cm、厚さ1.8cm、重量170gを測る。頁岩製で、中期に属する。

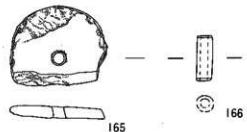
④ 紡錘車 (第21図-165)

3分の1を欠損している。内外面丁寧に研磨され、径0.8cmの円孔を穿っている。直径5.1cm、厚さ0.6cm、重量9.8gを測る。千枚岩製である。



⑤ 管玉 (第21図-166)

縦に半分に分れている。長さ2.4cm、推定径0.8cm、円孔径0.4cm、重量0.2gを測る。碧玉製である。



⑥ 磨製穿孔具 (第11図-79)

全長4.4cm、体部の幅2.5cm、厚さ1.8cmを測る。体部から段をなして錐部に移行する。錐部は先端部に向かって円錐形状に窄まって行くが、最先端部はわずかにふくらんでいる。錐部は研磨による磨耗が顕著であるが、最先端面と体部には研磨の跡が見られない。軟質砂岩製である。



第21図 包含層出土の石器

⑦ 石鎌 (第11図-81・82)

81は、凹基式石鎌で基端部がわずかに欠損している。両面に主剣離面が残る。断面平行四辺形を呈し、1.5gを測る。82は基部の形状が不明である。81よりも扁平で、重量は0.5gを測る。共にサヌカイト製である。

⑧ 刃器 (第12図-87)

台形状の平面形をなし、基部の厚さは2.5cmを測り、片側の主面に刃部をつくり出している。長さ12.0cm、刃部幅9.6cm、重量240gを測るサヌカイト製である。

⑨ 砥石 (第16図-109)

軟質砂岩製で1.045kgを測る大型の砥石である。使用面は3面あり、太型蛤刃石斧用と考えられる。

⑩ 叩石 (第12図-84・86・88・89)

図示した以外にも数点が出土している。すべて河原石(砂岩)を使用している。84以外は、主面のはぼ中央部に打痕が認められる。86は、縁部に煤が付着している。84は、3箇所に打撃痕が見られる。各々の重量は、84-77.3g、86-475g、88-435g、89-1,450kgである。

以上石器の観察を行ったが、ここで試掘調査出土のものも含めた若干の考察を行いたい。

石包丁、太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧は、試掘調査出土のものを合わせると各々、11、3、7個であり、柱状片刃石斧は1個も出土していない。酒井龍一氏は、「西日本各地における代表的な弥生時代の集落遺跡から出土した石器類〈石包丁・太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片

刃石斧)に焦点をあて、その数と組成率を観察することにより、初期農耕社会型式期における生業活動の地域的個性を把握⁽³¹⁾することに努め、『穂摘活動主体型』、『伐採活動主体型』、『穂摘・伐採両活動型』の地域が存在することを明らかにしている。当遺跡においては、石器の出土量が極少であるが、氏の分析方法に依拠して、その個性を明らかにしたい。まず1㎡あたりの石器の出土量を見ると、石包丁は0.008点、太型蛤刃石斧は0.002点、扁平型刃石斧は0.005点となる。(試掘調査、本発掘調査合せての面積は約1,400㎡である。)次に組成率は、石包丁54%、太型蛤刃石斧14.5%、扁平型刃石斧33%となる。これによると石包丁と石斧類は、ほぼ同数となり、上の分類にあてはめると、『穂摘、伐採両活動型』=北九州地方の現象と共通する。しかし、伐採斧=太型蛤刃と石包丁を比較すると、石包丁は2倍以上を占めており、『穂摘伐採両活動型』として当遺跡を把握することはできない。石斧類の数値を上げたのは加工用の扁平片刃石斧である。従って当遺跡の真の地域的特色は『穂摘活動主体型』=近畿地方中央部のタイプに近いと言えよう。

次に磨製穿孔具についてである。これは四国で初めての出土例である。磨製穿孔具については、すでに日本国内はもとより中国、朝鮮の諸例を集成し考察せられた中間研志氏の成果がある⁽³²⁾。それをもとに本例の位置付けを行いたい。先ず本例は、その型式から見て氏の1類に属し時期が異なるが、高橋貝塚出土中の1例と最も類似している⁽³³⁾。材質も同じである。しかしながら、先に述べたように錐部の最先端が肥厚し、その部分に研磨が認められないという点は、氏の挙げられた1類のどれとも異なる。先ず使用について見ると、未使用に近い先端部の状態から、対象が全く未穿孔の段階からの使用は考えられない。すなわち一定の小孔が穿がたれた後に用いられた孔の仕上げ等を行ったことが考えられる。次に穿孔の対象物であるが、錐部先端の形状・大きさからすれば石包丁を第一に挙げることができるが、最先端部を除くと円錐形をした錐部の全面に研磨痕があることから、もっと大きな孔を要するものが対象物として考えられよう。段部付近の錐部の径は17mmを測る。環状石斧の孔にしては小さすぎるし、現段階においては直ちに結論を出すことはできない。使用方法についても中間氏は種々復元を試みられているが、本例の場合、重量物を体部の端部に載せて回転したとは考えられない。可能性としては、指頭による反復回転か、それとも火切り棒の回転原理を応用したものと考えられる。すなわち体部に棒状のソケットを被せ、それに紐をつけて上下運動をさせることにより回転を加える方法である。

2 遺構

A区では3面、B区では2面の生活面を確認することができた。以下古い段階から順次に検出遺構の整理を行い、当遺跡の性格とその変遷を見て行くこととする。

(1) 下層の遺構

第K層表層で検出した遺構であり、当遺跡で最初に営まれた遺構である。すべて前期末に属

する。掘立柱建物の一部と考えられるSB1~3、土坑6~12、15~20、27~34、SD8・9、ピット多数を挙げることができる。P40・43には、柱根が残っていたことから掘立柱建物の一部と考えられる。両者の底には大形壺底部が置かれており、これが単なる礎盤として使われたのか、それとも何らかの宗教的意味合いを持たせたものなのか興味あるところである。なおP40の底部は前期末の中でも最も古い型式のものであり、且つその胎土が当遺跡の前期一般のものとは異なり、田村遺跡群の前期Ⅱ~Ⅲの段階のそれに類似していることも興味深い。またSB1~3は、基本的に掘立柱住居と考えられるが、高床であったのか、平地式であったのかについては不明である。

土坑は、不整形のものが多くその規模も大小さまざまであり、各々の性格を明らかにすることは難しい。しかしながら平面形から大きく2つに分けることができる。すなわち土坑の平面形態が溝状をなすものと楕円形または不整形のものである。前者にはSK6・8・9・12・15・16・19・30を、後者には7・10・11・17・18・20・27~34を該当させることができる。出土遺物の量は、前者が後者を圧倒的に凌駕している。田村遺跡群の前期に属する土坑の中で、前者のような溝状をなす例は、前期Ⅰ段階の掘立柱建物に付随する断面船底状をなす土坑以外には認めることができない。他の前期諸時期の土坑は、楕円形・方形プランを呈している。当溝状土坑は、掘立柱建物との位置関係や建物の軸方向からして、田村遺跡群前期Ⅰ段階で見られたような両者の位置関係を想定することはできない。しかし遺構の性格としては、掘立柱住居と関係の深い貯蔵穴的なものを考えることができよう。その他の土坑については、検出面からの深さも浅く遺物も少ないことから、その性格については全く不明と言わざるを得ない。

また多数存在するピットの中で、P239・246・252・257・324・325の底には、何十枚もの広葉樹の葉が結まっていた。中には葉緑素が残り光沢を保っているものさえあったことも付言しておきたい。

(2) 中層の遺構

Ⅴ層の表層で検出した遺構である。すべて中期Ⅰ~Ⅱ(古)に属するものである。掘立柱建物としてSB4、土坑SK1~5・14・21~26・35、SD1~7、SX1・2、ピット多数が存在する。SB4は、3間×3間以上とみられる掘立柱住居で、前期と同類のものとしてよからう。土坑も前期と同様に、溝状をなすものと他のタイプとがあるが、前者はSK1・35の2例を数えるのみである。また前期に比べると規模の大きな溝、SD1・3a・3b・4・5が現れる。すべて北から南に向かって走っており、地形の傾斜方向と合致している。南の低地に存在すると考えられる水田への用水とも考えられる。またAトレンチ西方にある落ち込みをSX1・2とした。これは、先述のように木の葉や籾状の編み物が敷き詰められており、他の土坑とは機能を異にするものと考えられる。これらの遺構の時期は、SK2・5・14、SD4が中期Ⅰ(前半)、SK1・SD1・SD5が中期Ⅱ(古)に比定することができるが、他のもの

については中期前葉と一括して考えざるを得ない。

(3) 上層の遺構

Aトレンチの第V層中で確認した生活面である。一つは、中央部分から東で確認した炭化物の広がり、淡褐色で粘性の極めて強い粘土の広がり、及びその東にあるSX3・4を挙げることができる。炭化物は、厚みがなくその下及び周辺が熱を受けて変色しているような形跡は認められない。粘土の広がり、先述のようにわずかではあるが厚味をもっており、包含層中の粘土とは色・土質共に全く異なり、しかも粘土中に多量のシャーモットを含んでいる。これは土器製作用の粘土である素地と考えられる。今後この粘土と当遺跡出土土器の胎土分析を行い、その結果の比較検討が必要となる。また東端にあるSX3・4は、炭化物と灰及び炭化材が入っていることから、炉址的なものか、あるいは素地の存在などから考えて土器焼成土坑の可能性もあるが、床・壁に火を受けた形跡が認められないので、その性格について決定を下すことはできない。

他の一つは、調査区西端の図示する範囲に131・143・151・152・155・158・160などの土器が集中的に廃棄された状態で出土したものを挙げる事ができる。これらの土器はすべて中期Ⅱ(古)に比定できるものである。

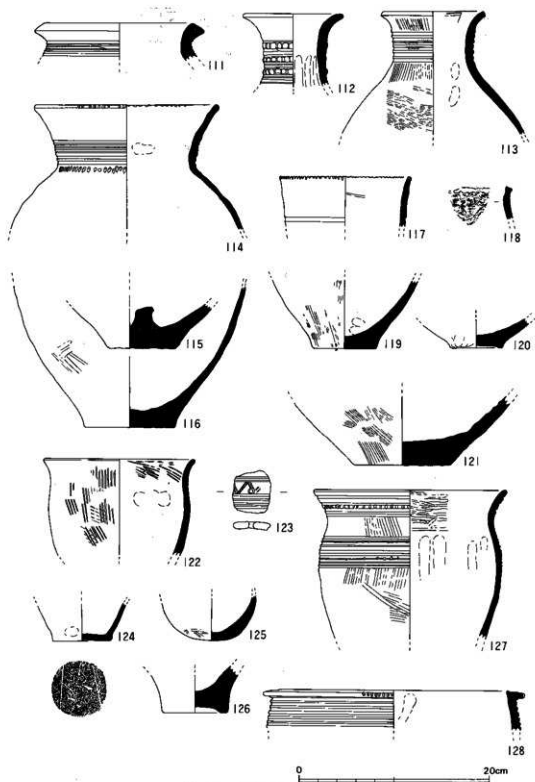
以上、遺構の変遷について述べた。当遺跡は、前期末に成立し中期前葉(中期Ⅱ-古)にかけて営まれた比較的短命な集落遺跡として把握することができよう。2度の調査において、出土遺物は、多量の土器をはじめ、石器、木製品、動植物遺体等を検出することができた。土器は、遠賀川式土器のみをもってしては、はかり難い地域色を持つものがあり周辺地域における弥生土器の成立・展開の様相を知る上で貴重な資料となるものである。

遺構は、調査面積に制限があったことによって、今一つその性格を明らかにすることができないものが多かった。堅穴住居址は、試掘調査も含めて検出するに至らなかった。調査区外に存在した可能性は十分に考えられるところであるが、最近類例が増加しつつある掘立柱建物と一般の住居として解釈することもあながち不可能なことではなからう。

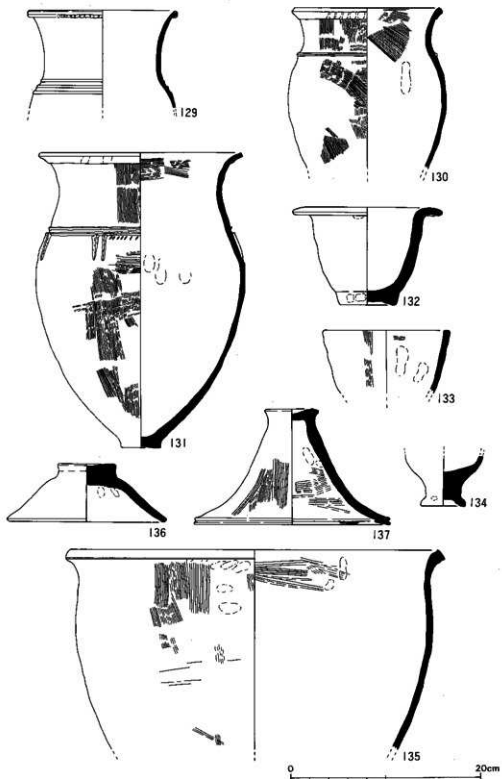
南四国中央部における当該期の遺跡は、田村遺跡群を除くと大篠遺跡⁽³⁴⁾、柳田遺跡⁽³⁵⁾、美良布遺跡⁽³⁶⁾、安田遺跡⁽³⁷⁾、山根遺跡⁽³⁸⁾等を挙げる事ができる。これら諸遺跡の中で、山根遺跡以外は、先行する弥生前期Ⅰ～Ⅲ段階の遺物は見られない。従ってこれらの諸遺跡の多くは、弥生前期初頭に成立し拠点の集落にまで成長した大集落との関連の中で生成・発展を遂げたものである。そしてその生成期においては、土器を見る限り拠点の集落がその初頭に経験したことと類似した複雑な現象が見受けられる。この複雑さの中に弥生社会を飛躍的に発展させることを可能とした諸要因が存在している。

(註)

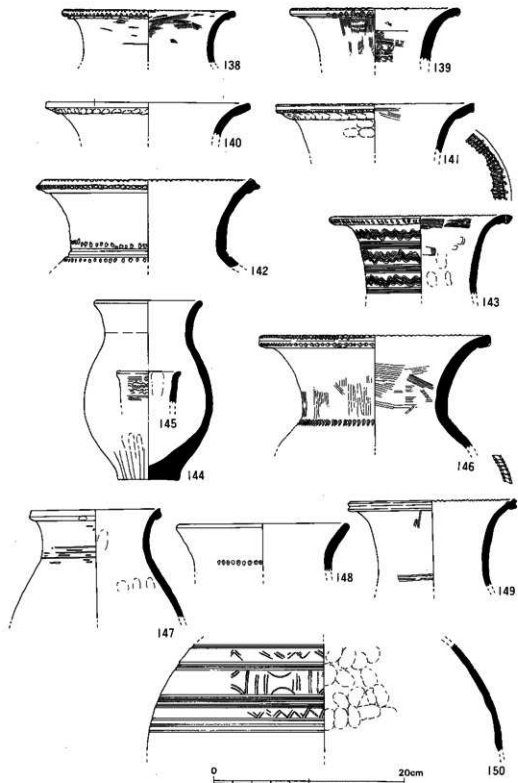
- (1) 高知県教育委員会『高知空港拡張整備事業に伴う田村遺跡群発掘調査報告書』第3分冊1986年
- (2) 出原恵三「南四国における弥生中期土器の展開—編年と地域間交流」『遺跡』31号 1988年
- (3) 岡本健児『高知県史』考古編 1968年
- (4) 同上
- (5) 同上
- (6) 岡本健児「中期弥生式土器」『高知県業山村埋蔵文化財発掘報告書』業山村教育委員会 1984年
- (7) 出原恵三「美良布遺跡の再検討」『土佐史談』177号 1988年
- (8) 佐原真「山城における弥生文化の成立—畿内第Ⅰ様式の細別と雲の宮遺跡出土土器の占める位置」『史林』50巻—5号 1987年
- (9) 同上
- 00 今里榮次「播磨弥生式土器の動態」『考古学研究』第15巻第4号 1969年
- 01 (2)に同じ
- 02 高橋啓明・出原恵三『下分遠崎遺跡発掘調査概報』香我美町教育委員会、1987年
- 03 (1)に同じ
- 04 高橋護「遠賀川式土器」『弥生文化の研究』4 1987年
- 05 田辺昭三・佐原真「弥生文化の発展と地域性 近畿」『日本の考古学』Ⅲ弥生時代 1966年
- 06 藤尾慎一郎「稲作受容期の甕形土器研究」『東アジアの考古と歴史』1987年
- 07 藤好史郎『中の池遺跡発掘調査概要』丸亀市教育委員会 1982年
- 08 04に同じ
- 09 00に同じ
- 20 岡本健児「南四国における櫛目文土器の成立」『高知女子大学紀要 人文・社会科学編』第18巻 1970年
- 岡本健児「弥生土器 四国2」『考古学ジャーナル』1973年
- 20 (7)に同じ
- 22 同上
- 23 佐原真「弥生式土器製作技術に関する二・三の考察 標指文と回転台をめぐる」『わたしたちの考古学』第5巻4号 19
- 24 (1)に同じ、Loc44のSD1のTなど敷点を認めるのみである。
- 25 (7)に同じ
- 26 七間一之・出原恵三『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(山側侵入灯設置区域)報告書』高知県教育委員会 1986年
- 27 丸山潔他『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1980年
- 28 (9)に同じ
- 29 同上
- 30 井藤純子「近畿」『弥生土器Ⅰ』1983年
- 31 酒井龍一「石器組織からみた弥生人の生業パターン」『文化財学報』奈良大学文化財学科 1986年
- 32 中間研志「磨製穿孔具集成」『石崎曲り田遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会 1985年
- 33 同上 69図の11
- 34 岡本健児『高知県史 考古編』1968年
- 35 出原恵三「高知市柳田遺跡について」『土佐史談』171号 1985年
- 36 (7)に同じ
- 37 岡本健児「高知縣安田出土の遠賀川式土器に就いて」『貝塚』31号 1951年
- 38 岡本健児・広田典夫『山根・石屋敷遺跡』春野町教育委員会 1976年
- 39 出原恵三「初期農耕集落の構造」『考古学研究』34巻3号 1987年



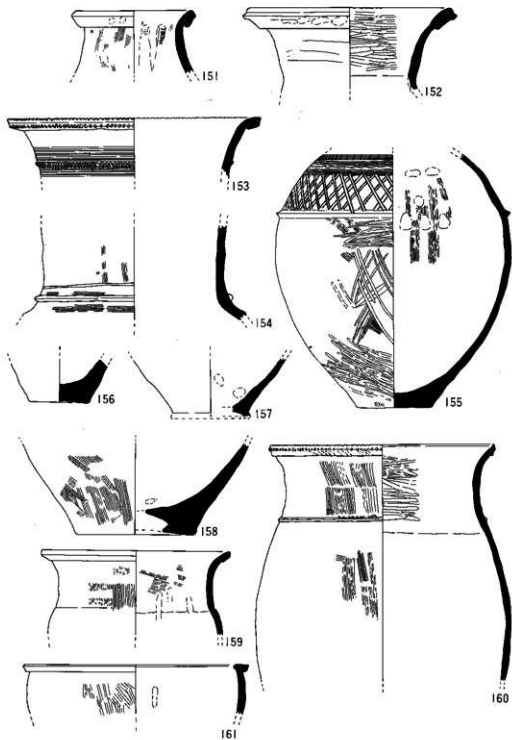
第22图 包含层出土物实测图



第23圖 包含層出土遺物實測圖



第24图 包含层出土物实测图



第25图 包含层出土物实测图

第七章 高知県香我美町下分遠崎遺跡出土の自然遺物

渡辺 誠

1. 自然遺物のリスト

1983年に高知県教育委員会によって発掘された、香美郡香我美町下分遠崎遺跡出土の自然遺物は、次の5種である。他に不明種子が1種ある。

時期は、弥生時代前期～中期である。

I. 動物遺体

1. サバ科カツオ *Katsuwonus pelamis* L.

II. 植物遺体

1. ヤマモモ科ヤマモモ *Myrica rubra* Sieber et Zucc.
2. ブナ科アカガシ *Quercus acuta* THUNBERG
3. ウリ科メロン仲間 *Cucumis melo* L.
4. ウリ科ヒメウタン仲間 *Lagenalia siceraria* STANGE

2. 資料別の検討

資料はサンプル瓶などに入れられた8件である。それらの番号順に検討結果と、関連事項を記すことにする。

- 1) カツオの脊椎骨 (図版A-1)。溝SD4 (弥生中期前半) 出土。

脊椎骨のうち腹椎骨3点が連なって出土している。

カツオは黒潮に乗って初夏に北上してくる回遊魚である。近・現代の土佐はこのカツオ漁の主要な根拠地の一つである。しかし沿岸漁業階段の縄文時代において盛んにカツオを取っていたのは東北地方の太平洋岸であり (渡辺1973)、この時代の土佐には貝塚は少なく、カツオの骨も検出されていない。本資料は現在判明している土佐最古の資料であり、黒潮文化圏における漁業発達史の基礎資料として注目される。

- 2) メロン仲間 (同2)。溝SD3 (弥生中期前半) 出土。

2点出土している。長さ4.6～5.3mm、平均4.95mm、幅ともに2.3mmである。

藤下采之氏 (1983) はメロン仲間の種子の大きさについて、長さ6.0mm以下を雑草メロン型の小粒、6.1～8.0mmをマクワウリ・シロウリ型の中粒、8.1mm以上をモルディカ型の大粒に類別している。そして渡来初期の縄文晩期や弥生時代には、雑草メロン型の小型種子が単独、あるいはマクワウリ・シロウリ型の種子に高頻度に混ざった状態で出土している。と記している。本例や資料7は雑草メロン型の小粒に属すが、これは現生のクソウリに近く、必ずしもうまいものではないらしい。

- 3) アカガシの種子 (同3)。溝SD4 (弥生中期前半) 出土。

3点出土している。

いわゆるドングリの仲間である。それらの大部分はアク抜きをしないと食べることはできない。そして種類によってアク抜きの方法に違いがあり、西南日本の照葉樹林帯に卓越するアカガシを含むカシ類は、水さらしのみでアク抜きが可能である（渡辺1987）。高知県東部の山地帯に伝わるカシヤリを作る時のカシの実のアク抜きは、その代表的な例である。

4) ヤマモモの種子（同4）。包含層（弥生中期前半）出土。

6点出土している。

同様に西南日本の照葉樹林帯に卓越する樹木であり、実は6月頃赤色に熟し、多汁質で甘酸っぱい。材は器具に、樹皮は染料に用いられる。高知県の県木である。

5) ヒョウタン仲間の種子（同5）。土壌SK6（弥生前～中期）出土。

6点出土している。長さ10.9～12.0mm、平均11.4mm、幅5.8～6.5mm、平均6.2mmである。

ヒョウタン仲間には、食用可能な種類（カンビョウ）と不可能な種類（千成ビョウタンなど）があるが、種子の形態は同じであり、その区別はできない。ただし食用以外にも、容器などとしてその利用範囲は広い。

6) メロン仲間の種子（同6）。包含層（弥生中期前半）出土。

2点出土している。長さ7.6～8.0mm、平均7.8mm、幅3.3～3.5mm、平均3.4mmである。

資料2・7と異なり、マクワウリ・シロウリ型の中粒に属す。

7) メロン仲間の種子（同7）。溝SD3（弥生前期末）出土。

4点出土している。長さ4.0～5.2mm、平均4.6mm、幅2.3～2.5mm、平均2.4mmである。

資料2と同様に、雑草メロン型の小粒に属す。

8) 種不明微細種子。包含層（弥生中期前半）出土。

3点出土している。

参考文献目録

北村四郎・村田源、1971：原色日本植物図鑑・木本編Ⅰ。大阪・保育社。

——、1979：原色日本植物図鑑・木本編Ⅱ。大阪・保育社。

藤下典之、1983：メロン仲間の系統文化と多様性・日本育種学会シンポジウム報告、24、3～21頁。日本育種学会・東京。

渡辺 誠、1973：縄文時代の漁業。東京・雄山閣。

——、1987：縄文時代の植物質食料・ドングリ類。考古学ジャーナル、279、24～頁。東京。

謝 辞

資料調査の機会を与えられ、種々御教示下さった高知県教育委員会の出原恵三氏、および資料整理に御協力下さった名古屋大学大学院学生の久保和士に対し、深謝の意を表する次第である。

遺物観察表 (第1表)

採遺番号	遺物番号	器名	注 記 (cm)	口徑 器高 器底径	形 態・文 様	手 法	備 考
1	SK1	甕	23.2 (5.4)	23.2 (5.4)	扁平状に開く口頸部を有す。口唇部はハタ状厚体による膨らみあり。口縁部内には、連続した波状の直線文を施した條線直線文。	口縁部外面には市玉 2.5cmの厚い粘土層を貼付け、指環で押圧する。口唇部は、ヨコ方向の強いなでにより凹状。口縁部内面はヨコ方向のハタ、外面はタ方向のハタ調整後、なで押す。	0.5~2mmの砂粒を含む。
2		甕	19.4 (2.8)	19.4 (2.8)	扁平やかなカーブを描く口縁部。口唇部は面をなす。	口縁部は指環で上方に施す上げ口唇部には指環直線が施される。外面ハタ調整後、口縁部内・外面、ヨコ方向のなで。	0.5~1mmのチャート、石灰、火山ガラスの砂粒を含む。
3	SK2	鉢	15.2 (11.5)	15.2 (11.5)	丸底の底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る。上から條線直線文を一帯、その下にハタ調整直線文を、次に條線による上段の直線文、下部には下段の直線文と4条のヘラ調整。	口唇部は、僅かに外方に膨らみ出す。調整内面下部に條線直線。	1~5mmのチャート、砂岩等の砂粒を含む。
4		甕	13.8 (9.8)	13.8 (9.8)	最大径を上腹部に有し、口縁部は僅かに外反。頸部間に太いヘラ調整直線。	口縁部外面はヨコ方向のなで調整。口縁部内面に指環直線。	0.5~4mmのチャート、砂岩の砂粒を含む。
5	SK4	甕	20.7 (1.2)	20.7 (1.2)	逆し字状口縁。口唇部は丸く締め。口縁部は外反する面をなす。口縁部下に1条のヘラ調整直線。	口縁部に粘土層を貼る。	外面は磨ける。1~4mmのチャート等の砂粒を含む。
6	SK5	甕	18.4 (4.0)	18.4 (4.0)	直線的に外方に立ち上がる頸部から口縁部が外方に反曲。口唇部は丸くおさめ。口唇部に膨らみあり。口縁部に径2mm前後の小孔。頸部にヘラ調整直線を2条まで認める。	口縁部内、外面はヨコ方向のなで調整。頸部外反ヨコ方向のハタ調整。	0.5~4mmのチャート等の砂粒を含む。黄土状。
7		甕	21.0 (5.4)	21.0 (5.4)	口縁部は扁平やかなカーブを描いて外反。口唇部は外反する面をなす。頸部太端にヘラ調整直線を1条まで認める。	外面はタ方向のハタ調整後、口縁部はヨコ方向のなで調整。内面ハタ調整。	0.5~2mmの砂岩の砂粒を少量含む。外蓋全面は磨ける。
8		甕	22.0 (4.8)	22.0 (4.8)	逆し字状口縁。口唇部は丸く締め。上腹部外面にも1条のヘラ調整直線。最下部直線の下に斜交直線文。	口縁部内、外面はヨコ方向のナダ調整。体部はタ方向のハタ調整。内面は直線の細いハタ調整による調整。	0.5~3mmのチャート火山ガラスの砂粒を含む。
9		甕	21.0 (9.4)	21.0 (9.4)	上腹部から頸部は窄まりながら直線的に立ち上がり、口縁部は外反。口唇部上端に斜目。上腹部外面は條線直線。頸部外反はタ方向の調整直線を2条。	口縁部は強いヨコ方向のなでにより凹状。頸部外反ヨコ方向のハタ調整。内面はヘラ磨き。外面に黒色物を散布。	0.5~2mmの砂粒を含む。
10	SK14	甕	12.1 (1.8)	12.1 (1.8)	口縁部は扁平状に外反。口縁部は上端に断頭三角形の斜目突帯。口唇部下端に斜目。	口縁部内・外面はヨコ方向のなで調整。	0.5~4mmのチャート、砂岩の砂粒を含む。
11		甕	8.2	8.2	平底の底部から内湾気味に立ちあがる。	調整は調整が著しく、観察不可。	1~8mmの比較的細かいチャートの砂粒を含む。
12		甕	22.0 (5.8)	22.0 (5.8)	頸部から薄らかに外反する口縁部。口唇部は丸く締め。ヘラ調整直線が斜目に外反タ方向の調整5条。	口縁部内面はタ方向のハタ調整後、ヨコ方向の丁寧な調整。	1~3mmのチャート、石灰の砂粒を含む。
13		甕			上腹部から頸部に向かって窄まり、口縁部に向かって扁平やかなカーブを描いて外反。口縁部外縁に1条の調整直線を貼付。上腹部に4条の小窓を斜交直線、指環で磨く。	上腹部の直線文を境に、上はなで、下は強いなで調整。内面は頸部以下はヘラ磨き(左一右)後、ヨコ方向のなで調整。	外面全面は磨ける。0.5~2mmのチャート砂岩の砂粒を含む。
14	SD1	甕	18.8 (4.0)	18.8 (4.0)	口縁部は扁平かに外反し、口唇部は外反し面をなす。	外面はタ方向、内面はヨコ方向のハタ調整。	1~2mmの火山ガラス、チャートの砂粒を含む。
15		甕	17.2 (19.2)	17.2 (19.2)	上腹部に頸部最大径を有し、頸部に向かって窄まり口縁部は薄らかに外反。口縁部は僅かに下方に拡張。口唇部は條線直線文と斜目、上腹部は條線直線文。	頸部外面はタ方向のハタ調整後、部分的に右左へのヘラ磨き。上腹部はヨコ方向のヘラ磨き。頸部内面ハタ調整。	1~5mmの砂粒を含む。
16		甕	15.8 (5.4)	15.8 (5.4)	僅かに薄らかなカーブを描く口縁部は逆し字状に外反。口唇部は丸く締め、斜目。頸部には4条のヘラ調整直線。	外面及び口縁部内面ハタ調整。	1~4mmのチャート、砂岩の砂粒を含む。
17	SD1	甕	23.8 (19.7)	23.8 (19.7)	上腹部から頸部にかけて窄まり、口縁部は強いカーブを描いて外反。口唇部は外反する面。頸部間に4条のヘラ調整直線。	口縁部外反タ方向のハタ、上腹部以下は強いなで調整。口唇部内面は右左へのヘラ磨き。下はなで調整。	外面全面は磨ける。
18		甕	(4.5)	5.6	上げ直線の直線から斜上外方に立ちあがる。	外面直線部分に突き直線らしきものがある。	半分近くを黒曜が占める。

遺物観察表 (第2表)

押印番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	口徑 高 調整 直径	形 態 ・ 文 様	手 法	備 考
19		甕	— 7.0	(8.1)	厚い底部から僅かに内湾気味に立ち上がる。	内湾底部付近に左上りのヘラ跡、底部外湾へラ磨き、内・外縁矢張り調整。	0.5~3mmのチャート、石炭、火山ガラスの砂粒を含む。
20		甕	(14.5) — 6.0	—	底部から内湾して立ち上がり、胴部中に最大径を有す。外面中に4条を単位とする輪線状文及び磨き。	外面ヘラ調整後、下半をヘラ磨き、内面はなで調整。	1~8mmのチャート、石炭、砂岩の砂粒を含む。
21	SD3	甕	— 19.8 (8.8)	(8.8)	内湾気味に立ち上がり、上胴部からはほぼ垂直に伸び、口縁部直下で外反。口縁部は逆し字状をなし、上面は水平な面、胴部は丸くおさめらる。口縁部は周目、上胴部に5条のヘラ調整痕、4と5条目の間に刺突。	外面は木道の細いヘラ調整、内面は木道の粗いヘラ調整の上をヨコで調整、内面中に指痕正度。	2mm前後のチャート、火山ガラス、石炭の砂粒を含む。
22		甕	(7.4) — 7.0	—	厚い平底の底部から、内湾気味に立ち上がる。	外面、細い木道のヘラ調整。	内面は全面磨ける。1~5mmのチャート、砂岩、火山ガラスの砂粒を含む。
23		甕	12.8 (7.0)	—	長い頸部から口縁部は逆し字状に外反。口唇部は凹状を呈し、上下端に周目、頸部外面にヘラ調整痕。口唇部に水平な突帯Aを貼付け、指痕で磨き上げる。	口唇部はヨコ方向のなで調整、外縁はヘラ調整、内面は下半にヘラ磨き、上半はヨコ方向のなで調整。	0.5~4mmのチャート等の砂粒を含む。
24		甕	13.0 (8.1)	—	頸部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部は強く外反。口縁部直上に断面コマゴコ状の突帯を貼付け、頸部外縁に10~11本のヘラ調整痕と若干な突帯Aを3条貼付け。口唇部の上・下に周目、口縁部に1列の小孔。	口唇部は強くヨコ方向のなで調整。	0.5~3mmのチャート、砂岩の砂粒を含む。
25		甕 蓋	14.1	—	緩やかな傾斜で下降し、口縁部は丸くおさめらる。	ヘラ調整後、口縁部内、外面ヨコ方向のなで調整。	内面は磨ける。0.5~3mmのチャート等の砂粒を含む。
26	SD4	ミニチュア 甕	3.5 6.3	—	胴部中に最大径を有し、口縁部に向って外反気味に立ち上がる。口唇部は外傾する面をなす。胴部から直線的に伸びる頸部、口唇部は逆し字状に外反する面をなす。頸部は外傾して面をなす。外湾に5条の太い沈線、沈線間には若干な突帯A。口縁部に3ヶを単位とする小孔。口縁部内面に2条の突帯A。	指痕正度。	0.5~1mmの砂粒を含む。
27		甕	21.2 (4.9)	—	口唇部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部は強く外反。口唇部直上に断面コマゴコ状の突帯を貼付け、頸部外縁に10~11本のヘラ調整痕と若干な突帯Aを3条貼付け。口唇部の上・下に周目、口縁部に1列の小孔。	突帯Aは挿入しており、指痕が残る。内・外面共に調整。	1~4mmのチャート、石炭の砂粒を含む。
28		甕	(5.9) — 7.0	—	口唇部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部は強く外反。口唇部直上に断面コマゴコ状の突帯を貼付け、頸部外縁に10~11本のヘラ調整痕と若干な突帯Aを3条貼付け。口唇部の上・下に周目、口縁部に1列の小孔。	胴部内・外面共にヘラ磨き。	0.5~3mmのチャート、石炭、砂岩、シャモット等の砂粒を含む。
29		甕	(7.3) — 7.4	—	上胴部から頸部に向って伸び、口縁部は外反。	胴部外面はなで調整、底部外面に指痕正度。	正面外面に植物繊維の正度、内面に有機物が付着。
30		甕	(11.0) 20.0	—	上胴部から頸部に向って伸び、口縁部は外反。	頸部外面は木道の粗い原形によるヘラ調整、上胴部以下は細いなで調整。内面に頸部と胴部との接合部。	外面全面磨ける。0.5~2mmのチャート、砂岩の砂粒を含む。
31		甕 蓋	8.6 (6.1)	—	天井部は薄く込み、全体上半は僅かに膨らみをもって下降。口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさめらる。	内・外共に指痕正度、なで調整。	0.5~5mmのチャート、火山ガラスの砂粒を含む。
32	SD5	甕	12.8 (8.8)	—	長く直線的に外方に伸びる頸部から口縁部は外反。口唇部は幅広い外傾する面をなす。	外面はヨコ方向のヘラ調整、口唇部及び口縁部内・外面共にヨコ方向のなで調整。	内・外面両面磨ける。0.5~2mmのチャート、砂岩の砂粒を含む。
33		甕	11.0 (7.6)	—	僅かに外反気味に立ち上がった胴部から口縁部は強く外反。口唇部は凹状を呈し、上方に膨張気味。口唇部直下に周目、頸部外面に15条のヘラ調整痕、沈線間に突帯Aを4条、突帯Aは指痕で磨き出す。口縁部には2列1列の小孔。	胴部内面に指痕正度。	1~4mmのチャート等の砂粒を含む。
34	SD5	甕	15.8 (9.0)	—	長く直線的に立ち上がった胴部から口縁部は強く外反。口唇部は凹状を呈し、上方に膨張気味。口唇部直下に周目、頸部外面に15条のヘラ調整痕、沈線間に突帯Aを4条、突帯Aは指痕で磨き出す。口縁部には2列1列の小孔。	内面ヨコ方向、外面ヨコ方向のヘラ調整。	1~5mmの砂粒を含む。

遺物観察表 (第3表)

押出番号	遺物番号	形種	法量 (cm)	口縁部 断面 形状	形 類・文 様	手 法	備 考
35	"	壺	— — — (4.6)	— — — —	腹部に広い上腹部から直立する頸部。頸部外面下部に横線直文2本とその間に扁平な突帯Aを巻面に施すように付け、指で踏み上げる。上腹部に横線直文、厚さは3条単位。	腹部はメタ方向のハケ調整。	0.2~3mmのチャート、砂粒の砂粒を含む。
36	"	壺	— — — 22.0 (9.6)	— — — —	口縁部は扁平状に外反。口縁部外面に1.5cm幅の粘土帯を貼付け、口唇部は幅広い。	腹部外面はハケ調整の上へヘア磨き。	0.5~2mmの砂粒を含む。
37	"	壺	— — — 22.2 (9.1)	— — — —	直線的に外方に立ちあがる頸部から口縁部は扁平状に外反。口縁部外面に1.8cm幅の粘土帯を貼付け、口唇部は凹状。	口縁部外面は木製の刷毛でハケ調整。	0.5~3mmのチャート、火山ガラス、シャークの砂粒を含む。
38	"	鉢	— — — (5.2)	— — — —	底脚状の底唇を指で踏み出す。	胴部外面は指で磨き。	胴部外面に黒色にチャート、石英の砂粒を含む。
39	"	ミニチュア壺	— — — 4.8 (5.1)	— — — —	指で押えた底部から内筒しながら立ちあがる。	内・外面共に手で調整。	外面は指で磨き、1~4mmのチャート、砂粒の砂粒を含む。
40	"	壺	— — — 11.0 (5.4)	— — — —	胴部と頸部の間に段を有し、腹中に外反。口唇部は直をなす。口唇部上・下縁部に刻目。	観察不可能。	1~3mmの砂粒等の砂粒を少量含む。
41	"	鉢	— — — (2.7)	— — — —	丸底気味の底唇から上外方に直線的に立ちあがる。	内面は細なハケ及び手で調整。	外面全面に紅く、2次の火成で紅く紫色。粘土中にシャークの砂粒を含む。
42	"	壺	— — — 22.6 (5.6)	— — — —	口縁部は緩やかなカーブを描いて外反。口縁部外面に粘土帯を貼付け、線先状を施す。頸部外面にはヘア磨きを施す。その下に直線的に山形文。口唇部は丸く約1本の紋線、その下に刻目。	外面はメタ方向、内面はメタ方向のハケ調整。	0.5~4mmのチャート、砂粒、火山ガラスの砂粒を含む。
43	"	壺	— — — (9.5)	— — — —	平底状の底唇から内筒気味に立ちあがる。	外面はハケ調整の上をなで調整。内面は指で磨きによるなで調整。底唇と胴部での接合痕。	0.5~3mmのチャート、火山ガラスの砂粒を含む。
44	"	壺	— — — 21.6 (4.8)	— — — —	口縁部は扁平状に外反。口唇部は凹状をなし、上下端に刻目。頸部外面に3条を1単位とする横線直文、その下に突帯A。さらにその下に横線直文を施す可能性。上唇気味の底唇から内筒気味に立ちあがる。	口唇部はメタ方向の強いなで調整。	0.5~3mmのチャート、砂粒の砂粒を含む。
45	"	壺	— — — (12.3)	— — — —	口縁部は扁平状に外反。口唇部は丸く約1本の紋線、その下に刻目。	外面は右下りのハケ調整を施すが大抵分は厚紙。内面は刷毛で調整。	0.5~3mmのチャート、砂粒、火山ガラスの砂粒を含む。
46	P27	壺	— — — 10.0 15.0 (3.4)	— — — —	口縁部は扁平状に外反。口唇部は外反する面。	外面に横かにハケ調整。黒色物を散布す。	0.5~2mmのチャート、クワ磨の砂粒を含む。
47	P34	壺	— — — 12.0 (2.4)	— — — —	口縁部は扁平状に外反。口縁部内面に扁平な突帯Aを2条貼付けし刻目。突帯部に刻目文。口唇部上・下縁部に刻目。頸部外面に横線直文と直線文帯間に突帯A。厚さは3条を1単位。	観察不可能。	0.5~2mmのチャート、火山ガラスの砂粒を多く含む。
48	SK6	壺	— — — 14.4 (4.4)	— — — —	口縁部は扁平状に外反。口唇部は丸く約1本の紋線、口唇部下方は肥厚させる。	口縁部内面はハケ調整。外面はメタ方向のなで調整。	1~4mmの正圓的に多いチャート等の砂粒を含む。
49	"	壺	— — — 20.4 (5.4)	— — — —	口縁部は緩やかにカーブを描きながら外反。口唇部は外反する面をなす。	内面はメタ方向のハケ調整。外面は観察不可能。	外面は磨ける。1~3mmのチャート、砂粒、シャークの砂粒を含む。
50	SK6	壺	— — — (9.4)	— — — —	胴部中に最大径を有す。外面に11条以上のヘア磨き線。その間に扁平な凹形砂文と突帯A点文。	外面は木製の刷毛に厚紙によるハケ調整。内面はハケ及び手で調整。	1~3mmのチャート、砂粒の砂粒を含む。
51	"	壺	— — — (8.2)	— — — —	13本のヘア磨き線を配し、その中に刻目突帯を1条貼付。紋線帯の下に凹形砂文。	外面はハケ調整。内面はなで調整。	0.5~2mmの砂粒を少量含む。炭灰混入。購入品。
52	SK7	壺	— — — (8.7)	— — — —	僅かに上唇気味の底唇から内筒気味に立ちあがる。	外面はハケ調整の後、丁寧なヘア磨き。内面はヘア磨き。外面には黒色物を散布しているようである。	1~2mmのチャート等の砂粒を少量含む。

遺物観察表 (第4表)

探検番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	口部 高 開 閉 状態	形態・文様	手 法	備 考
53	SK 8	壺	— — (6.5)	— — —	直立気体の胴部から口縁部は外反。胴部は12条のヘラ挿線。その間に4条の帯状の闊平な突帯を器表に組み込むように彫付し、指環で溝を上げる。	外面はネテ方向のヘケ調整。内面は左上りのヘケ調整をなす。	0.5~2mmのチャート1枚の砂粒を含む。
54		壺	— — (7.0) 11.4	— — —	厚い上唇気体の胴部から胴上外方に直線的に立ちあがる。	外面はヘラ磨き。内面はなで調整。	0.5~3mmのチャート、石灰、火山ガラスの砂粒を含む。下側部 1/3ぐらいに大きな黒塵。
55		甌	— — 21.6 (16.0)	— — —	内唇気体に立ち上がった胴部から口縁部は直線状に外反。口唇部は丸くおさめ、口縁部は露かに肥厚。外面口縁下に8条のヘラ挿線。	外面及び口縁部内面はヘケ調整。内面上部はヨコ方向のヘケ磨き。	1~3mmの正側の細いチャートの砂粒を含む。外面全面窪ける。内面気角による有機物の付着。
56	SK 9	壺	— — 13.0 (2.8)	— — —	口縁部は闊平状に外反。口唇部は面をなす。	内・外面共ヘケ調整。	1~4mmのチャート、砂粒の砂粒を含む。
57		壺	— — (7.1) 4.0	— — —	低い底面から内磨して立ち上り胴部は半球状。胴部外面中位付近に1条のヘラ挿線。	外面はヘケ調整後、ヘラ磨き。内面はなで調整。	1~3mmの砂粒チャート、火山ガラスの砂粒を含む。
58	SK 10	甌	— — (7.8) 9.6	— — —	下胴部は、直線的に外方に立ちあがる。	外面ヘケ調整。	1~6mmの砂粒チャートの砂粒を含む。外面窪け。紅色。内面は黒塵子によって有機物が付着。
59		甌	— — 18.1 (15.9)	— — —	上胴部に最大径を有し、胴部に向って窄まり。口縁部は闊やかなカーブを帯びて外反。口唇部外周は5条、上胴部外周の太いヘラ挿線。口縁部上胴部の沈線帯の間には帯状の浮文を彫付し、指環で覆い。	胴部外面は右下りの木理の粗いヘケ調整。口縁部内面はヨコ方向。胴部内面はネテ方向のヘケ磨き。	0.5~3mmのチャート、砂粒、火山ガラスの砂粒を含む。
60	SK 12	甌	— — 17.6 (8.0) 17.4	— — —	下胴部は直線的に面をなし、口唇部に向ってわずかに外反しながら立ち上がる。口唇部外面に、断面三角形の周目突帯を彫付し、逆し字状を呈す。上段に10条、下段に8条以上のヘラ挿線を配し、斜突文を2段にわたってめぐらす。	外面、木理の粗い原体によるネテ方向のヘケ調整。内面はヨコ方向のなで調整。	0.5~2mmの砂粒を含む。黒入りの可能性あり。外反、全面ススける。
61	"	"	— — 22.4 (7.7) 22.0	— — —	知意状に外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ刻目を施す。外面に8条のヘラ挿線を配す。	口唇部外反。木理の粗い原体によるヨコ方向のヘケ後、木理の粗い原体によるヘケ調整。口縁部内面木理の粗い原体によるヨコ方向のヘケ調整。胴部内面ネテ方向のヘケ調整。	粘土に、チャート、砂粒を含む。外面全面ススける。
62	"	"	— — 23.8 (9.0) 22.2	— — —	知意状に外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ刻目を施す。外面上段に5条、下段に4条のヘラ挿線文を配し、その間に双線による山形文を施す。	口縁部内外面ヨコ方向のなで調整。外面上胴部以下ネテ方向のヘケ磨き。内面はヨコ方向のヘケ磨き。	0.5~2mmの砂粒を含む。チャート、石灰を含む。
63	"	甌	— — (14.8) 28.0	— — —	胴部が発達している。胴部最大径付近に9条、胴部上部に2条以上のヘラ挿線文を配す。	上胴部外面は、ヨコ及びネテ方向のヘケ調整。胴部内面は、ネテ方向のヘケ調整。内面には、指環状の突帯。	
64	"	"	— — (12.0) 4.0	— — —	胴部の発達した後の上胴部。上段に11条、下段に12条のヘラ挿線を配し、間に竹管で突出した円形浮文を配す。下段の沈線帯の下には、双線による山形文を配す。	上胴部外面、ネテ方向のヘケ調整。胴部内面は右下りのヘケ調整。	
65	SK 13	壺	— — 22.0 11.4	— — —	つまみ部は、隆起を呈す。器底上平は、外方にふくらみ。下平は大きなカーブを描いて下隆。口唇部にはヘラ挿線を1条配す。	つまみ部は、ヨコ方向の指なで調整。外面はネテ方向のヘケ調整。口縁部内外面ヨコ方向のヘケ調整。	粘土中には、チャート、火山ガラスを含む。口縁部内面は3mmで「ア」字状にススける。外面4分の1に黒塵あり。
66	SK 15	壺	— — 15.0 (8.7)	— — —	直線的に立ち上がる胴部から、口縁が外反。胴部は丸くおさめる。胴部外面に9条以上のヘラ挿線あり。	外面ネテ方向のヘケ調整。内面はヨコ方向のヘケ調整後、口縁部内面はヨコ方向のなで調整。	粘土中には、チャート、砂粒、火山ガラスを含む。

遺物観察表 (第5表)

探検番号	遺物番号	部類	長さ (cm)	口徑 高さ 底径	形 状 ・ 文 様	手 法	備 考
67	SK15	罎	—	—	口縁部は、ゆるやかなカーブを帯びて外反。口縁部は丸くおさまる刻目を施す。外面に、交差によるタテ方向の線文あり。	外周タテ方向のヘケ調整。	0.5~2mmの砂粒を含む。外面はススける。
68	"	"	23.9 (11.0)	—	口縁部は、口縁部から大きなカーブを描いて外反。口縁部には、交差口を施す。口縁部外面を8分割し、2種の文様帯で飾る。1つは交差口をタテ方向に11~13条施す。他の1つは、交差口を放射状に配しその下に瘤状の浮文を施す。	内外面で調整。	0.5~2mmの砂粒を含む。 1層の土層。
69	"	"	17.4 (9.9) 15.2	—	口縁部に外反する口縁部。口唇部は丸くおさまる。全面に刻目を施す。上胴部外面に、7条のヘケ線文を配す。	口縁部、内外面ヨコ方向のヘケ調整。胴部外面タテ方向のヘケ調整。内面には、指環状痕跡あり。	0.5~3mmの砂粒を含む。 埋入品の可能性あり。内外面をススける。
70	"	"	23.6 (6.0)	—	口縁部に外反する口縁部。口唇部は丸くおさまる。ト平に刻目を施す。上胴部外面に6条のヘケ線文を配す。	口縁部内外面、ヨコ方向のヘケ調整。胴部外面タテ方向・内面ヨコ方向のヘケ調整。	0.5~3mmの砂粒を含む。(チャート、砂粒)
71	"	蓋	17.4 (3.0)	—	口唇部は、ゆるやかに下降。口唇部は丸くおさまる。	口縁部内面へラ磨き。笠部内面へケ調整。	"
72	SK34	罎	—	—	裾部は、ゆるやかに下降。口唇部は丸くおさまる。	外周タテ方向のヘケ調整。	"
73	SD9	"	6.4 (8.0)	—	下胴部は裾部から、内湾気味に立ち上がる。	"	" 外面はススける。
74	P40	蓋	6.4 (8.0) (10.0)	—	わずかに上げ底状の底面。	"	裏口縁が認められる。柱の破綻に転用。
75	P43	蓋	7.5 (11.0)	—	下胴部は内湾気味に立ち上がる。	外面は、ヘケ調整後へラ磨り。最終的へラ磨き。内面は不定方向のヘケ調整。	チャート、火山ガラス、砂粒を全く含まない。 柱の破綻に転用
76	P63	"	9.4 (5.0)	—	口唇部は直立し口縁部に至る。口唇部は丸くおさまる。胴部外面に8条のヘケ線文を配す。	内そと面の調整不明。	粘土中に、チャート、石英、砂粒を含む。
77	P103	"	18.0 (7.4)	—	口唇部は直線的に外方へ伸びる。口唇部は外傾する面をなす。胴部外面に7条のヘケ線文を配す。口唇部には、細いヘケ線文を一列施す。	"	粘土中の砂粒はほとんどチャート。
78	P306	蓋	10.0 (2.0)	—	ゆるやかに外反しながら下降し口唇部に至る。口唇部は丸くおさまる。	外面、タテ方向のヘケ調整。	粘土中にチャートを認め、埋入品の可能性あり。
90	P190	"	13.4 (1.4)	—	"	口縁部内外面ヨコ方向のナチ。	0.1~3mmの砂粒を含む。(チャート...)
91	SK21	蓋	—	—	口唇部に、ヘケ線文を3条まで認める。	内外面の調整調整不明。内面に指環状痕跡あり。	"
92	SK22	"	5.0 (9.4)	—	わずかに上げ底状の底面から、外方に広く開く下胴部がつく。	外面タテ方向のヘケ調整後、部分的にへラ磨き。	1~3mmの砂粒を含む。
93	"	"	9.4 (8.4) 30.4	—	胴部が膨満している。上・下に各6条のヘケ線文を施し、土層の上と、上段と下段の間に放射線による山形文を施す。	外面上平は、右下りのヘケ調整。外面下平は、ヨコ方向のへラ磨き。	0.5~3mmの砂粒(チャート、砂粒...)
94	SK23	"	8.8 (4.4)	—	口唇部は扁平状に外反。口唇部は平に刻目。口唇部内面交差口を2条。胴部外面に6条のヘケ線文を配す。口唇部は丸くおさまる。	内面右下りのヘケ調整。	1~3mmの砂粒(チャート、砂粒)
95	"	"	21.2 (5.0)	—	口唇部は扁平状に外反。口唇部は、外傾する面をなす。	外面タテ方向、内面ヨコ方向のヘケ調整。	粘土中に、チャートを多く含む。

遺物観察表 (第6表)

標本番号	遺物番号	種類	重量 (g)	口徑 器高 器底	形 態・文 様	子 法	備 考
96	S K 24	鉢	—	(6.6)	下胴部から直線的に立ち上がる。 丸底の可能性あり。	内外共にヘラ磨きあり。	0.5~1mmの砂粒を含む。(チャート) 外面スリける。
97	"	"	—	22.6 (4.5)	直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	断面調整不明。	0.5~2mmの砂粒を含む。(チャート、水晶…) 外面スリける。
98	"	紡錘車	4.4 0.6 15 #	—	土器転用、未穿孔。	外面にヘケ調整。	0.5~2mmの砂粒を含む。(砂粒チャート…)
99	S K 19	壺	—	(12.4)	F胴部は内湾気味に立ち上がる。	外面はタテ方向のヘラ磨きが行われて認められる。	" 全面スリける。
100	"	"	—	9.4 (3.0)	内湾気味に立ち上がる口縁部。内面には、附土層を「つ」字状に貼付。その方向に刺突文を配す。口唇部は丸くおさめる。	断面調整不明。	0.5~2mmの砂粒を含む。(砂粒チャート…)
101	S K 25	壺	—	19.0 (6.0)	口縁部はゆるやかに外反。腹部をわずかに上方につまみ上げ、口唇部は外傾する面をなす。	外面はタテ方向、内面はヨコ方向のヘケ調整。	0.5~2mmの砂粒を含む。 外面、全面スリける。
102	"	"	—	(5.75)	下胴部は、底部からわずかに内湾気味に立ち上がる。	外面ヘケ、内面にて調整。	1~3mmの砂粒を含む。(チャート、石英、火山ガラス) 内面スリける。
103	S K 29	"	—	17.5 (5.2)	直線的に立ち上がった上胴部から口縁部がゆるやかに外反。口唇部は丸くおさめる。外面に6条のヘラ磨き線。	口縁部内外面はヨコ方向にて調整。断面はタテ方向のヘケ調整。	1~5mmの砂粒を含む。(チャート、砂粒) 外面スリける。
104	S K 29	壺	—	(5.0)	下胴部は、わずかに外反気味に立ち上がる。	底部外面の光テラ粘土が剥離している。外面はタテ方向のヘケ調整。	0.5~8mmの砂粒を含む。(チャート、石英、砂岩、粘土片岩…) 内外面スリける。
105	P 278	壺	—	(9.5)	わずかに上げ底気味の底部から、内湾気味に立ち上がる。	外面はタテ方向のヘケ調整後、底部部分に新収容体によるなでと磨りが施される。外底にも磨りあり。	0.5~3mmの砂粒を含む。(チャート、砂岩…)
106	P 281	壺	—	(6.9)	—	外面は、タテ方向のヘケ、断面調整は不明。	1~5mmの砂粒を含む。(チャート、砂岩) 一次的な磨きにより砂粒の配列がばげしい。
107	P 325	"	—	(7.5)	厚い底面から、下胴部は直線的に立ち上がる。	外面ヘケ調整、内面は磨きによるなで。	" (内面だけ)
111	包含層埋	壺	—	7.8	無垢で、口唇部が直して外反、口唇部が外反する面をなす。上胴部に6条以上のヘラ磨き線を通す。	口縁部内外面ヨコ方向の強いなで。	0.5~3mmの砂粒を多く含む。(チャート…) 外面スリける。
112	"	"	—	10.6 (7.7)	長い胴部から、口縁部が幅平状に外反。腹部に6条のヘケ調整線と突突Aを貼付。	口縁部内外面ヨコ方向にて調整。腹部内面に、指痕によるなでが見られる。	1~3mmの砂粒を含む。(チャート)
113	"	"	—	10.6 (13.1)	肩の裏側ない上胴部、直立気味の胴部から口縁部が外反。口唇部は外傾する面をなす。腹部外面に6条のヘラ磨き線を通す。	口縁部外面はタテ方向、上胴部外面はヨコ方向のヘケ調整。口縁部内面はヨコ方向のヘケ調整。	1~4mmの砂粒を含む。(砂とんぼがチャート)
114	V	"	—	19.0 (13.2)	丸味を密びた上胴部から、大口径の口縁部が外反。口唇部は丸くおさめる。内・外面に刺突。頸部外面に6条のヘラ磨き線と刺突文を配す。	断面調整不明。	1~5mmの砂粒。
115	Ⅷ	"	—	—	底部内面に高さ2cmの突起あり。	"	" (チャート、砂岩) 外面スリける。
116	"	"	—	(15.0)	下胴部は内湾気味に立ち上がる。	外面にヘラ磨き。	下胴部に大きな黒痕あり。
			—	9.4			

遺物観察表 (第7表)

押戻番号	層位	層種	法長 (cm)	口徑 形高 底径	形 態・文 様	手 法	備 考
117	V	蓋	—	—	口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部には深い刻目を配す。上胴部に深い凹線を配す。	外面タテ方向のヘケ調整。	0.5~2mmの砂粒を含む。(火山ガラス……)
118	VI	#	(3.0)	—	口縁部をつまみ出し、下端に刻目。	口縁部外面に指面圧痕。	1~3mmの砂粒を含む。
119	#	空	(7.0)	—	下胴部は内湾気味に立ち上がる。	外面タテ方向のヘケ調整。	外面ススける。 1~3mmの砂粒を多く含む。(チャート、砂粒) 内面ススける。
120	#	*	(3.0)	—	下胴部は、外方に広がりながら内湾して立ち上がる。上げ底状の底面。	外面タテ方向のヘケ磨き。	0.5~5mmの砂粒。
121	#	#	(7.3)	—	下胴部は、深い凹部から直線的に立ち上がる。	外面右下りのヘケ調整。	0.5~2mmの砂粒を多く含む。(チャート……) 内面に有機物の痕跡付き
122	#	蓋	15.8 (10.2) 15.0	—	上胴部から頸部に向かって窄まり、口縁部は外反。口唇部は丸くおさめる。	口唇部外面タテ方向、内面右下り、胴部外面タテ及び右下りのヘケ調整。	紐土中に砂山、火山ガラスを含む。 外面ススける。
123	V	砂粒層	底厚さ 重量 4.0 0.8 14.2g	—	土器転用。外面にヘケ溝直線と双線による山形文を配す。	—	0.5~2mmの砂粒を含む。(チャート……)
124	VI	蓋	(4.0)	—	下胴部は直線的に立ち上がる。	底面に木葉の圧痕あり。	1層の土器。
125	#	鉢	(4.8)	—	丸底	外面ヘケ調整。 内面ナゲ調整。	0.5~2mmの砂粒を多く含む。(チャート) 外面ススける。
126	#	蓋	(4.0)	—	上げ底の底面から、外反気味に立ち上がる。	外面タテ方向のヘケ調整。	#
127	#	#	20.2 (15.9) 19.3	—	上胴部から頸部に向かって窄まり、口縁部は直線的に外方に伸びる。口唇部は丸くおさめる。口縁部外面に5条、上胴部内面に9条のヘケ溝直線を配す。刻文を3段にわたって施す。	外ヘケ調整。口縁部内面ヨコ方向のヘケ磨きを施す。	# 内湾ススける。
128	V	#	24.3 (4.1)	—	口縁部外面に刻目突帯を施す。逆J字状口縁。外面にヘケ溝直線を5条まで認める。	内外面などで調整。	1~5mmの砂粒を含む。(チャート、火山ガラス……)
129	包含層V	蓋	15.6 (10.3) 15.4	—	わずかに張り出す上胴部から、深い口唇部が、逆J状に外反する。口縁部外面に刻目突帯を施す。上胴部に突符Gを配す。	内外面などで調整。	1mm前後の砂粒を含む。(チャートその他) 1層の土器。 頸にもなる可能性ある。
130	V	蓋	15.4 (16.8) 16.7	—	上胴部から頸部に向かって窄まり、口縁部はゆるやかに外反する。口縁部外面に幅1cmの粘土帯を施す。上胴部に突符B。	胴部外面タテ方向、胴部外面右下り。 口縁部内面上下りのヘケ調整。	1~2mmの砂粒。 外面はススける。
131	V	#	21.2 31.5 22.0 4.3	—	上胴部から頸部に向かって直線的に窄まり。口縁部は強く外反。口縁部外面には、幅1.0cmの粘土帯を施す。口唇部は外湾する面をなす。上胴部に突符Bを2条、棒状突文を施す。	外面タテ方向、口縁部内面ヨコ方向のヘケ調整。ヘケの下地に印き目らしきものが認められる。	1mm前後の砂粒を含む。(チャート、火山ガラス……) 1層の土器。
132	#	鉢	16.0 10.3 5.8 13.2 (6.7)	—	内湾気味に立ち上がり、口唇部は強く外反。口唇部は丸くおさめる。上げ底状の底面。	内面ヘケ磨き。底面外面に指面圧痕あり。	1mm前後の砂粒(チャート)を多く含む。
133	V~VI	#	(6.7)	—	口唇部は水平な面をなす。	外面タテ方向のヘケ内面に指面圧痕。	1~3mmの砂粒を含む。
134	V	#	(5.4)	—	台付鉢	基部調整不明。	0.5~2mmの砂粒を含む。(チャート、砂粒) 底面外面に指面圧痕
135	V	#	38.2 (21.3) 37.8	—	上胴部に向かって内湾気味に立ち上がり、わずかに窄まりながら頸部へ至る。口縁部は外反。口唇部は外湾する面をなす。	外面タテ方向のヘケ調整。 内面ヨコ方向のヘケ調整。	1~3mmの砂粒を含む。

遺物観察表 (第8表)

採回番号	選別番号	部類	法量 (cm)	口部高 口部底 口部底 口部底	形 態・文 様	手 法	備 考
136	V	蓋	16.2 — —	6.2 — —	厚い円柱状のつまみ足より、蓋部は直線的に下降、口部部は内嵌する面をなす。	蓋面調整不明。	# (チャートを含む)
137	M	#	20.6 12.3 —	— — —	外反りのつまみ足から、直線的に下降し、口部部近くで外反、口部部内面には幅 1.5cmの粘土帯を貼付。	内外面、ハケ調整。	1~3mmの砂粒を含む。(チャート、砂粒) 口部部内面は、薄皮にススける。
138	包含層M	蓋	18.0 (5.5) —	18.0 (5.5) —	口部部が大きく外反、口部部は丸くおさめ、上下に刻目を施す。外面に1条の突帯文目を貼付。	外面タテ方向、内面ヨコ方向のハケ。	0.5~1mmの砂粒を含む。(チャート) 外側ススける。磨きの可能性もある。
139	V	#	17.4 (5.7) —	17.4 (5.7) —	口部部が圓斗状に外反、口部部は丸くおさめ、上下に刻目。	#	#
140	V	#	21.3 (3.6) —	21.3 (3.6) —	口部部が圓斗状に外反、外面に粘土帯を貼付。口部部は外嵌する面をなす。	蓋面調整不明。	0.5~2mmの砂粒を含む。(チャート、石灰)
141	#	#	21.0 (5.2) —	21.0 (5.2) —	口部部が圓斗状に外反、口部部は強いヨコ方向のナデにより凹状を呈し、上下に刻目。口部部外面 2.1cm幅の粘土帯を貼付し、指環で押す。	口部部内面ヨコ方向のハケ調整	# (チャート…)
142	M	#	21.8 (8.8) —	21.8 (8.8) —	口部部が圓斗状に外反、口部部外面に1.5cm幅の粘土帯を貼付。口部部は凹状をなして上下に刻目。頸部部間に2条のヘラ指環線を配し、その上下に刺突文を施す。	内外面、木製の刷毛の媒体で、本定方向のなで調整を行う。 嵌合部で調整している。	1~3mmの砂粒を含む。 (チャート、大粒のシャロセツトあり)
143	V	#	19.4 (8.4) —	19.4 (8.4) —	高さ僅かな口部部が圓斗状に外反、口部部外面に1.3cm幅の粘土帯を貼付。口部部は内嵌する面をなし、刻目を施す。口部部内面はハケ媒体で調整を施し、その上を2条のヘラ指環線が走る。頸部部外面は、柳葉状文と直線文が交互に施される。	口部部内面、ヨコ方向のハケ調整。	1~3mmの砂粒を含む。 (チャート…)
144	V	#	11.0 19.0 13.4 9.4	11.0 19.0 13.4 9.4	しっくりした底面から、内筒状味に立ち上がり、下頸部に最大径を有す。口部部は圓斗状に外反。	外筒はタテ方向のヘラ磨き。	#
145	V	壺	7.2 (4.0) —	7.2 (4.0) —	頸部は直立し、口部部が傾く外反、外面には、柳葉直線文と波状文を交互に配す。	蓋面調整は不明。	砂粒をほとんど含まない。
146	M	#	24.0 (12.0) —	24.0 (12.0) —	口部部は圓斗状に外反、口部部外面に粘土帯を貼付。口部部は凹状を呈し上下に刻目。	外面タテ方向、内面ヨコ方向のハケ調整。 断面に外筒傾度を確認する。	0.5粒1mmの砂粒を多く含む。 (チャート、石灰、シャロセツト)
147	M	#	13.8 (11.5) —	13.8 (11.5) —	頸部の膨らまない胴部から、口部部はゆるやかに外反する。頸部部外面に粘土帯を貼付。頸部部間に柳葉直線文を配す。	蓋面調整は不明。	0.5~1mmの砂粒を含む。(チャート…)
148	V	#	17.8 (5.0) —	17.8 (5.0) —	口部部は直線的に外反し、口部部は外嵌する面をなす。頸部外面刻目文。	#	1~3mmの砂粒多い。
149	#	#	17.4 (9.2) —	17.4 (9.2) —	口部部は、圓斗状に外反、口部部外面に断面三角の粘土帯を貼付。口部部は凹状を呈し、口部部内面に突帯入2条、頸部部間に柳葉直線文。	口部部外面タテ方向のハケ調整。	# (チャート)を多く含む)
150	M	#	— (11.5) —	— (11.5) —	波状文をなす頸部の上半部、柳葉直線線の半粒は不明なるも、3~4条を配し、その間に、波線による山列を、裏文を配す。	外面の器面調整不明。 内面には、指環直度が顕著。	0.5~3mmの砂粒を多く含む。 (チャート、砂粒)
151	V	#	12.1 (6.7) —	12.1 (6.7) —	頸部は内筒状に向って立ち上がり、口部部は外反、口部部外面には、1.5cm幅の厚い粘土帯を貼付。口部部は外嵌する面をなす。	外面タテ方向、内面ヨコ方向のハケ調整。	0.5~2mmの砂粒を含む。 (チャート他)
152	V	#	21.4 (8.0) —	21.4 (8.0) —	口部部は圓斗状に外反、口部部外面に幅 2.3cmの粘土帯を貼付。口部部は凹状を呈す。	口部部はヨコ方向の強いなで調整。 口部部内面ヨコ方向のヘラ磨き。	1~3mmの砂粒を含む。 (チャート、石灰)

遺物観察表 (第9表)

神田番号	遺物番号	形 状	寸 法 (cm)	口縁部 の 形状 と 底 径	形 態 ・ 文 様	手 法	備 考
153	#	#	29.8 (9.5) — —	口縁部は、わずかに外反。口縁部外面に1.2cm幅の粘土帯を貼付。口縁部は紐状をなし、上下に刻目。頸部外面は復巻構成の縦溝直線文と突帯Aを配す。	頸部は、 π コ方向の強いなで調整。頸部調整は不明。	0.5~2mmの砂粒を含む。	
154	V	#	(10.0) — —	直立する頸部。頸部底面に突帯Bを貼付。突帯の上下に横溝直線文。	外面タテ方向のヘケ調整。	#	
155	V	壺	(26.5) 2.5 8.0 — —	卵圓形の胴部。上から横線直線文、波状文、双線による帯文、突帯Bを貼す。	外面はヘケ調整後にヘラ磨き。内面タテ方向のヘケ調整。	0.5mm前後の砂粒を含む。(チャート、砂…)	
156	Ⅵ	壺	(4.0) — 6.4 — —	厚い底面から、下胴部は放射的に外方に立ち上がる。	外縁接合の裏口縁を認める。	1~4mmの砂粒を含む。(チャート、砂…) 裏口縁にススが行き。	
157	Ⅳ	壺	(6.1) — — — —	下胴部はわずかに内湾気味に立ち上がる。	底面は、内反刻目部で割線。	1~3mmの砂粒を含む。(チャート、砂…)	
158	V	#	(9.6) — 12.4 — —	下胴部は、厚い底面から内湾気味に立ち上がる。	外面タテ方向のヘケ調整。	#	
159	V~Ⅵ	壺	20.0 (9.0) 18.4 — —	直立気味の頸部から、口縁部は漏斗状に外反。口縁部外面1.2cm幅の粘土帯を貼付。口唇部は丸くおさめる。	頸部外面タテ方向、内面 π コ方向のヘケ調整。胴部外面強いなで。	1~2mmの砂粒を含む。(チャート、砂…) 胴部外面ススける。	
160	V	#	23.8 (25.0) 27.2 — —	卵圓形の胴部から、放射的に外方に伸びる頸部。口縁部は外反。口縁部外面に、幅1cmの粘土帯を貼付。二帯をつまみ上げる。口唇部と下胴に刻目。上胴部に突帯Bと斜線文を配す。	外面タテ方向のナゲ調整。口唇部内面は、 π コ方向のヘケ調整の下の地の上を、ヘラ磨き。	0.5~3mmの砂粒を含む。(チャート、砂…)	

圖 版



調査区全景（南から）



調査区全景（南から）

PL 2

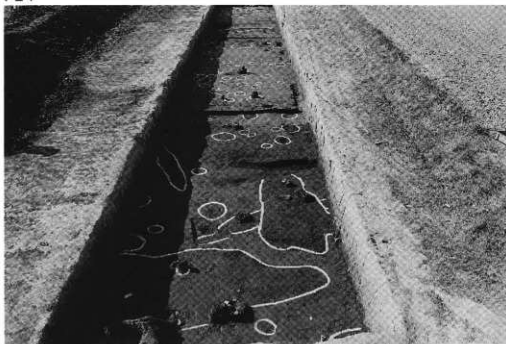


A区中層遺構検出状況（東から）



A区中層遺構発掘状況（東から）

PL 4



A区下層（Ⅸ層上面）遺物出土状況（東から）



A区遺構完掘状況（西から）



B区遺構検出状況（西から）

PL 6



SK31ヒョウタン出土状況



籠状遺物出土状況



SK10墓 (70) 出土状況



SK10墓 (70) 出土状況

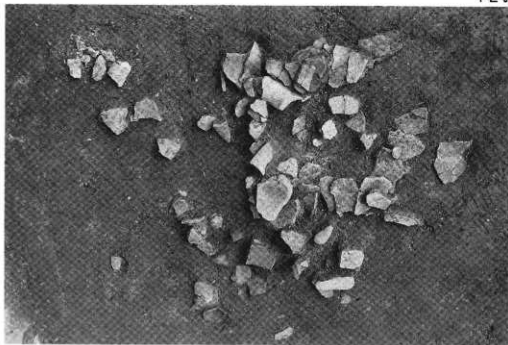
PL 8



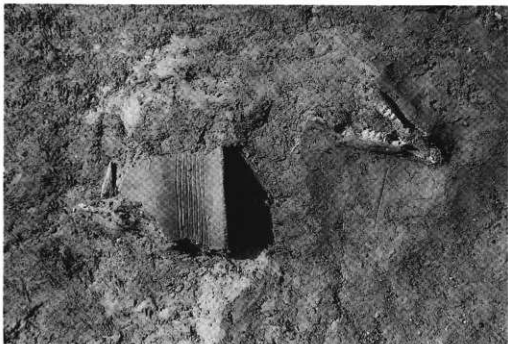
包含層土器出土狀況 (A区、V層)



包含層土器出土狀況 (A区、V層)



包含層土器出土狀況 (A区、V層)



SK15號 (92) 猪下顎出土狀況

PL10



SD 5号出土状況



柱1半截 (A区、Ⅱ層)



上層 (V'層) 炭化物



上層 (V'層) 炭化物

PL 12



P43柱根、土器出土状況



P40土器転用礎盤出土状況

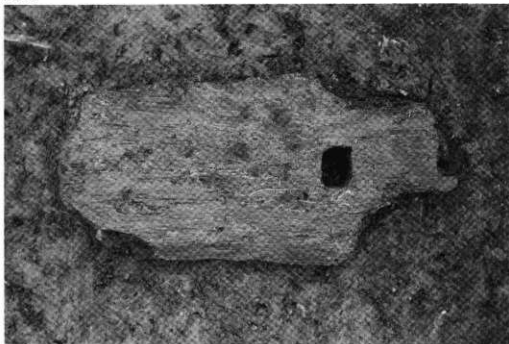


銅出土状況 (A区、V層)



SD 3 - a 包丁形木製品出土状況

PL14



鐮出土狀況 (A区、Ⅷ層)

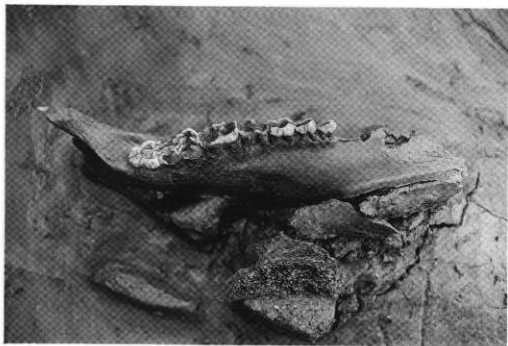


鐮出土狀況 (A区、Ⅷ層)

PL15

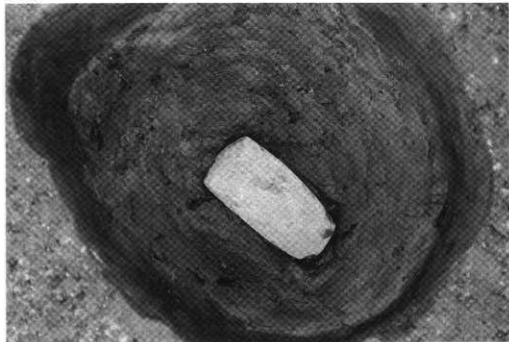


SD 5 鹿角出土狀況

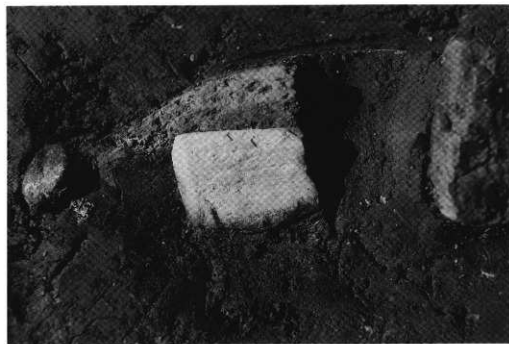


SK 12 鹿下顎出土狀況

PL16



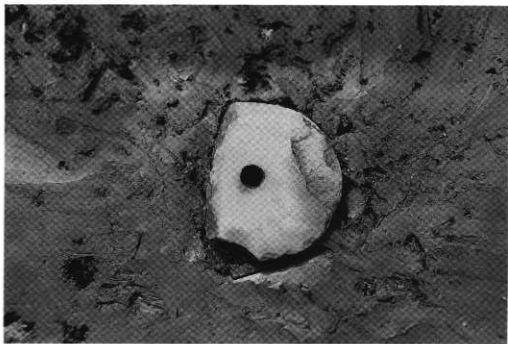
P271内扁平片刃石斧出土状况



扁平片刃石斧出土状况 (A区、V层)



石包丁・土器底部出土狀況（VI層）



石製紡錘車出土狀況（B区、VI層）

PL18



壺出土狀況 (A区、Ⅶ層)



壺 (144) 出土狀況 (A区、Ⅴ層)



包含層土器出土狀況 (A区、Ⅷ層)



包含層土器出土狀況 (A区、Ⅵ層)

PL20



包含層土器出土狀況 (A区、Ⅷ層)



包含層土器出土狀況 (A区、Ⅴ層)



SD 3 a 道物出土状況



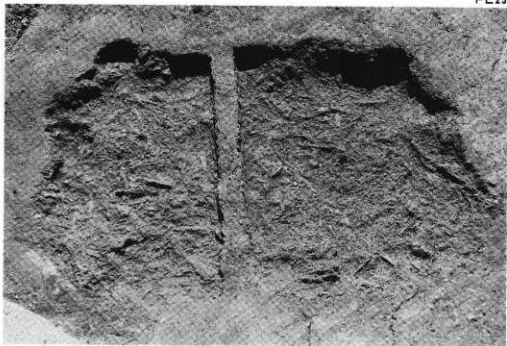
SD 3 a・b 完掘状況



SD 3 a・bセクション



SD 4・5 発掘状況



SX 2 完掘状況



籠状木製品

PL24



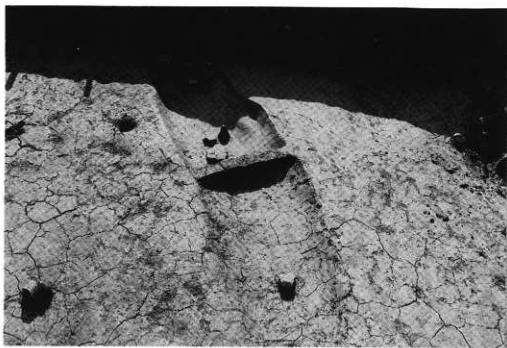
SD 5 遺物出土状況



SD 1 遺物出土状況



SK 8 遺物出土状況



SK12遺物出土状況

PL 26



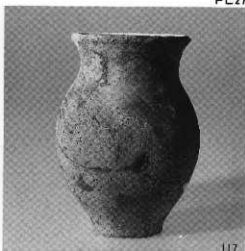
SK 23完掘状況



SK 5セクション



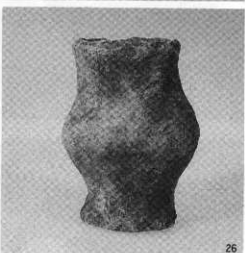
136



117



135



26

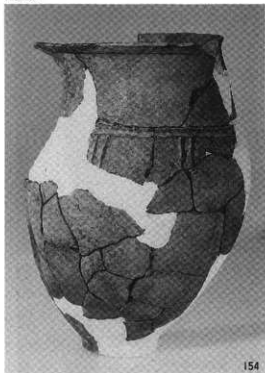


160



65

壺・ミニチュア・蓋



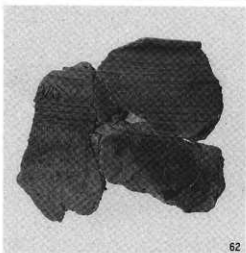
罍・壺



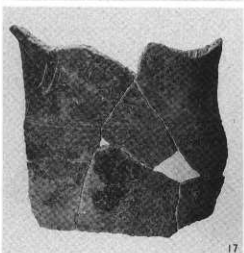
3



68



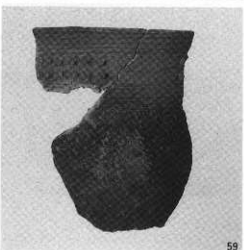
62



17



145

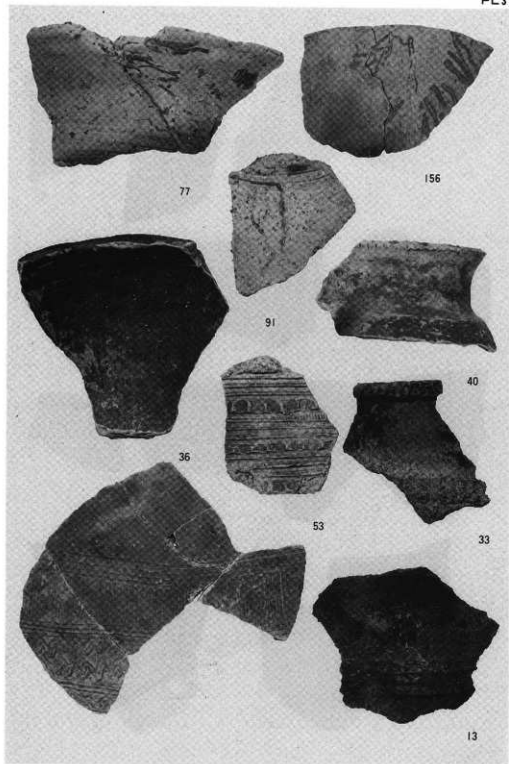


59

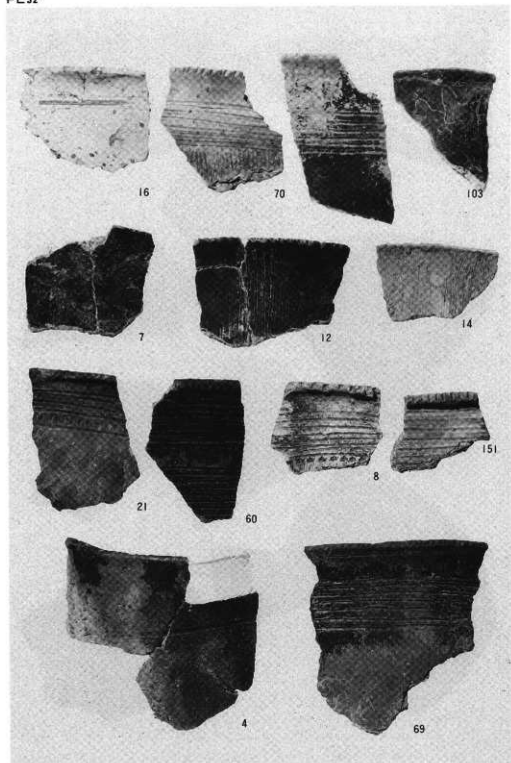
圖



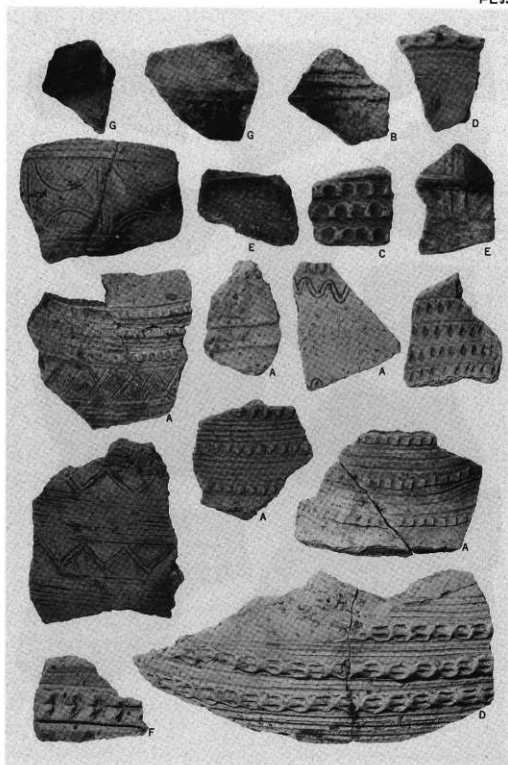
壹



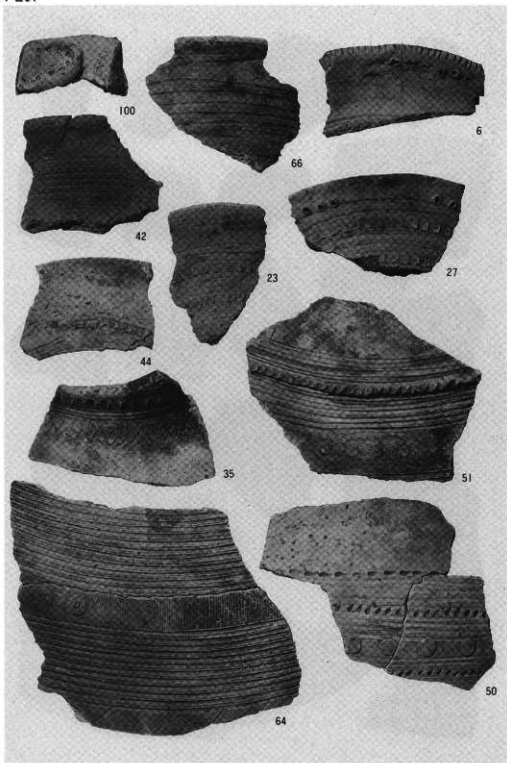
壺・口縁部胴部細片



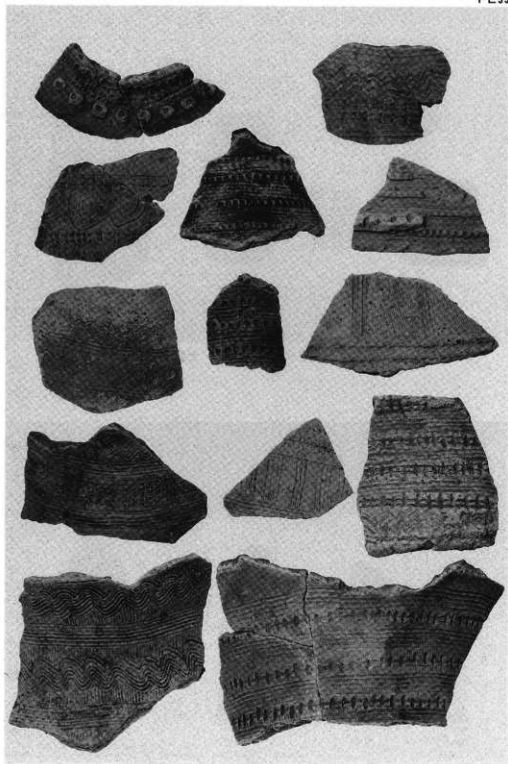
甕口縁部



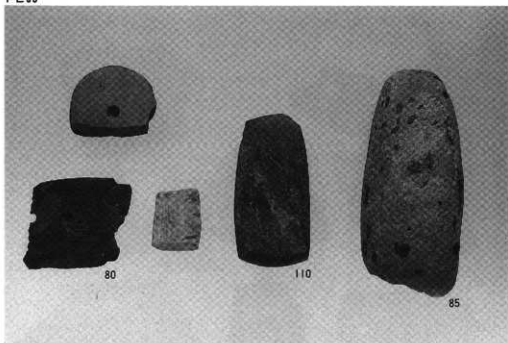
突帶文各種



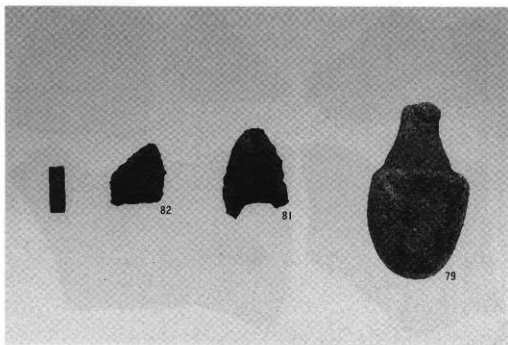
壺文様各種 (前期)



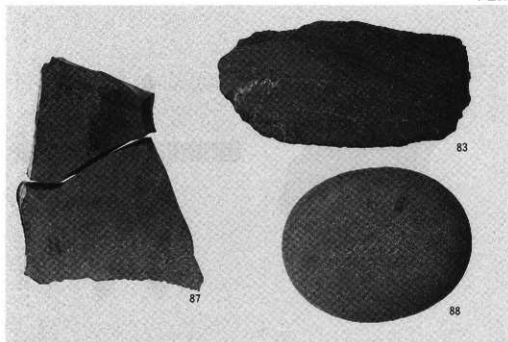
壹文樣各種 (中期)



紡錘車・石包丁・扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧



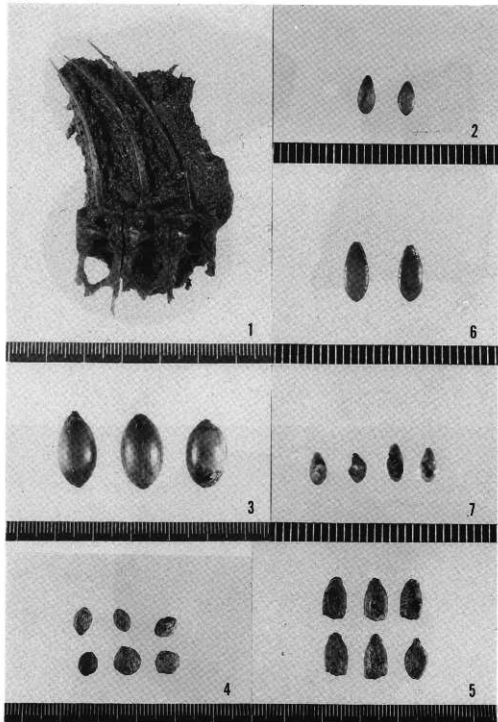
管玉・石鏃・磨製穿孔具



刃器・打製石包丁・叩石



土器底部木の葉圧痕



自然遺物 (縮尺 2・6・7 : 2倍大、他は実大)

1 : カツオ護椎骨、2・6・7 : メロン仲間、3 : アカガシ、4 : ヤマモモ、5 : ヒョウタン仲間

高知県香美郡 下分遠崎遺跡(I)

香我美町教育委員会埋蔵文化財
報告書第4集

平成元年3月31日

編集・発行 香我美町教育委員会
(香美郡香我美町徳王子)

印刷 共和印刷株式会社